
名無しの影使い

サソリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無しの影使い

【著者名】

N4195N

【作者名】

サソリ

【あらすじ】

ある日、目を覚ますと自分が何者なのか覚えていなかつた少年魔導士のお話。

原作、設定を遵守しませんので御注意下さい。

プロローグ

「…………」

ゆつくりと重たい目蓋を開けると、爛々と輝く太陽に雲一つない
青い空が見えた。

近くに川があるので、静かに水が流れる音が聞こえる。

ああ、落ち着くな。

久しぶりだ、こんなに暖かい自然を感じるのは……それにしても
中々にリアルな夢だな。

「」のままでは任務に行く気がなくなるよ。何時までも、このまど
ろみの中に居たい。

…………しかしそう言つわけにもいかんだろう。早く夢よ、覚めない
か。私は しないといけないのだから……。

そう考えると、私はゆつくりと目を閉じ、暖かい自然が溢れる夢
の世界に別れを告げた。

……はずだった。

次に目を覚まし、目蓋を開けた時に見た光景は爛々と輝く太陽に雲一つない青い空だった。

……ああ確信したね、これは夢じゃない。

体を温める太陽の光に突き抜けるそよ風。

そして寝転がっている体を包み込んでくれず、痛みつけるかのように固く血口主張する歯盤。

手を延ばせば、ぴちゅんと水に触れた。流れているから川か？…冷たいな。まさか、こんな近くにあるとは……。

それにして、夢がここまでリアルなものか。

「はあ……ビードよ……リード……」

ゆつくりと上半身だけ起りす。すると私の目には覆い茂る木々と清流の「」とく流れる川が見えた。

……知らない場所だ。

それにして、よくこんな山、川、木々で寝ていいら
れたものだ。

体のあちこち痛いぞ。しかし、しかしだ、今はそんなことはどうでもいい。

何故こんな場所にいるのだ。それにこんな真っ黒なスースなんぞ着ていたか？

私は にいたは……あれ？……？いや
？……？……私はどこにいたんだっけ？

……それより私は何者だ？私の名前は？

……
……

……思い出せないだと……

……まさか記憶喪失だとでも四つのか？

いやいや、ただ気が動転して混乱しているだけだろう。もう少し冷静になって考えてみよう。

自分の名前ぐらいはすぐに思い出せるだろうよ。やつかった私は岩盤に寝転がつたまま、思考に没頭する。

……しかし……一向に自分自身のことは何も思い出せることは出来

なかつた。

……やせじこじことなつた……。

……しかし、しかしだ。そう焦ることはないな。川や木のことが分かるんだ。と暫つことは一時的な記憶喪失だつ。

……まあ、何時か思い出すや……

それより、これからどうするかだな。このまま寝転がっていても意味はないし、ウジウジ考えていてもどうしようもない。

今は、現状の把握をしなければ一進も二進もいかない状態なのだ。このどこのあるかも分かつていなかつたからな。

さて考えるより即行動だ。そう考え、立ち上がつた私は、辺りを見回したが自然以外何もなかつた。

人工物がない、どこかの森みたいだな。何故ここにいるかはわからぬが

……探索の前に、まずは腹ごしらえをするか。

【ぐう～】

ふむ、ちゅうど辺にいるんだ。魚でも食べるとするか。

やう思考しながら川をじっと眺めると、光に反射されて私自身の姿が映し出された。

肩口まで伸びた真っ白な髪に、赤色の瞳……。男とも女とも取れる子供のように幼い顔立ち。120センチほどの小さじ身体。

……誰だコイツ……

つて、それを考える前に飯だ、飯。腹が減つては何もできないからな。

思考を逸らし、川を眺めると魚が泳いでいるのだけれど。こくつかの魚影を見つけることができる。

よし、食べ物は豊富にあるようだな。これで一安心と叫んだところだ。

さて魔法でも使って……ふむ……魔法のことは忘れていないよ

うだ。何とも都合の良い記憶喪失のようだな。

と言つて覚えていないのは本当に自分自身のことだけみたいだな。

つとそれより飯だ。はてさて、魔法はきちんと発動するかな？

【影槍】

ぼそつと小さく呟き、黒光りする魔方陣を足元に展開させる。

すると、その行為によって絶命した魚が、
ふかふかと浮かんでき
た。

ジのやら魔法は正常に発動し、魚影から漆黒の槍が飛び出して、見事に魚の真ん中を貫いたようだ。

すでに絶命し、影槍によつて幾らか体を失い軽くなつた魚は沈むことなく、ふかふかと浮かんでゐる。

「ふむ、一丁上がりといやうやつだな」

そしてまた魔方陣を展開せし。次は自分の影から、こゝるこゝると漆黒の手を数本出す。

そして浮かんでいる魚の所まで長く伸ばし数匹の魚を回収した。

ふむ、上出来、上出来

さてお食事の時間だ

「…………知らない天井だ」

またしても知らない場所にいる。ビニだ、コレは……

確か私は魚を食べて……から記憶がないな。

「やつと起きたかい」

私が知らない天井を見つめ……いや天井でもないな。あれは木？もしや……コレは木の中なのか？何とも辺鄙な場所にベットを置いてるものだ。

「聞いているのかい？」

「つー？……む……何だ、誰だおまえは……」

いきなり喋り掛けられたからビックリしたじゃないか。てか誰だ？この婆さんは……。

私にいきなり話しかけてきたのは、Yシャツと長ースカートの上に真っ赤なマントを羽織っている婆さんだった。

ピンク色の髪の毛を頭の後ろでお団子にして金色の髪飾りで止めている。

たぶん若い頃は美人だったろう。

「命の恩人にその態度は酷いもんだね。 いらっしゃいと聞くよ。 あんた何者だい？」

「……命の恩人だと？ 私は助けられた記憶などないが？」

「あんた、あの川の川魚を生で食べただろう。 あそこの川魚は毒を持つていてね。 …… ワタシが偶然通り掛からなかつたら、あんた今頃あの世行きだよ」

むつ…… そいつ言えば少し思い出してきたぞ。

確か魚を食べて苦しかつたような…… とこいつとはこの婆さんの言つこととは本当に同じとか？

しかし、人に出会えるとは運がいい。 これで現状がわかるな。

「 そいつが。 礼をいつてやる。 ところで、 おまえは誰だ。 こいつはビンだ。 さつさと答えないとぶち殺すぞ？」

「…… 礼儀がなつてない子供だね。 しかもなんて口の聞き方だい！」

「おい、ババア？ 聞いてんのか？ お前は誰だと聞いているんだ！」

「相手に聞く前に自分が名乗るのが礼儀だと知らないのかい！」

ちつ、それぐらいで怒つてんじやねえよ。短氣すぎじやないのか、この婆。

つか……名前か……覚えてねえんだよな。ふむ、偽名でも名乗る

う
む

これだ！この名前しかない！！！

はつ！？

「私の名前は、ナナシだ」

「……あんた、舐めてんのかい？」

何！？なめているだと？一生懸命考えた名前だぞ。

「本当の」とだ。何だその眼は？人様の名前に文句あんのか？ああ？」

「はあ……じゃあ家名はなんだい？」

「ネームレスだ！」

「…………」

何だ、婆さん？そんなに私の田を見ないでくれ。……恥ずかしいじゃないか。

「あんた……もしかして記憶がないのかい？」

「な、何故それを！？」

心を読んだのか！？コイツア驚いた！？

「はあ、厄介な生き物を拾つてしまつたよ。それにネーミングセンス無を過ぎだ、この子供は……」

何だ、そのやれやれみたいなポーズは……。

「それよつもお前の名前は何だ。私は答えたんだ。わあ言ふべー。【び
ちんーー】『わやつーー』」

「わりきから年上に對して礼儀がなつてないよー。」

ぐおお、何で力で呴きやがる。コブが出来るじゃないか。いや既に出来て来てるじゃないか。

ぐおおおお、

ジンジンするわ

「……ワタシの名前は　　だ」

「あん？頭やすりつてたから聞いてなかつた…もつー回聞え「何だつて？」……ついてぐだりこ。お婆様　」

恐怖！？そんな田で睨まないでくれよ……それにしても向て田だ。あつと他の人間にも恐れられてんが、この婆さん。

てか、この婆さんには逆らわない方がよさそうだな。命がいくつあっても足りないよつな氣がする。

「まあ、いいだろ。ワタシの名前はポーリュシカだ」

……ポーリュシカ……知らない名前だ。

「そしてここにはフィオーレ王国にある森の中に作られた私の家だよ」

フィオーレ？

……そんな国、聞いたことないぞ。

ビーッだ、ここはー？

婆さんに拾われて数ヶ月が経つ。

最初は知らない国で暮らすことは、戸惑いも多かったものの、さすが私と言えよう。

たつた数ヶ月で大分ここでの暮らしにも慣れってきた。

既に婆さんの家は私の家同然だ。しかし、しかしだ。記憶の方はさっぱりなんだ。

残念ながら全くと詰つて良こほど、何も思ひ出さることは出来ないのだ。

思ひ出すために色々と試行錯誤はやつているんだ。

朝の森林浴は日課だ。それに毎日ベッドで「ロロロロ。夜は瞑想などをしている。そして「飯は満腹になるまで食べていふ。

むう……これだけ一生懸命に頑張つてゐるのだが、一向に思ひ出す気配はない。

くわうー頑張つてゐるのにーどうしてー

そんな風に毎日が大変な私である。ちなみに現在は初めて田を覚ました場所。つまり川がある場所で森林浴をしている。

空にはたゆたう雲が流れ、そよそよと吹く風が心地良い。

ああ、記憶を思い出しちゃうだ。

「……あんた、働きな……」

「え？」

そんな風にこつも通り頑張つてこると、瀧さんの声が聞こえた。

「……何だ、幻聴か……」

「 もう一度言ひよ。あんた働きな」

「はー?」

じつやら幻聴ではなかつたよつだ。私の視界には無表情で向やら
田つきが怖い瀧さんがあつた。

爛々と太陽が照り、雲がたゆたう朝の時間。

フィオーレ王国にある東の森にはナナシとポーリュシカがいた。

「……なんだ幻覚か……」

虚ろな目で空を見上げていたナナシは、ポーリュシカを見てそう咳くと再び空を見上げ始めた。

それを無言で見ていたポーリュシカはつかつかと歩み寄り拳を握ると

「痛つ！？」

ナナシに向けて振り下ろした。

「あにすんだ！ ババア！」

涙目で叩かれた頭を抑えているナナシは口を開くが

「毎日、毎日、グータラグータラ！ 少しは働いたらどうなんだい！」

「馬鹿やうひー！私は記憶を思い出せりと頑張っているんだよー見てみろよ、この気合いの入った田をー。」

「……虚ろだね。あんたは記憶喪失を逆手に取つて働きたくないだけだよ。言い訳はいいから来なー！」

「違つー？ 本物の記憶を思い出せりとー！ 痛い痛い痛いー？ やめてー！」

小柄な体であるナナシは抵抗らしい抵抗も出来ずにポーリュシカに引きずられて森の奥へと消えてしまった。

その後、とある木の家では

「嫌でー、嫌でー。働きたくないでー、嫌でー

「黙々をこねるんじやないー！ せつやと薬草を集めに来なー！」

と言つて余韻があったとかなかつたとか。

「数か月後」

「だあー、薬草なんぞ知るかー！見付ける訳がねえだろ？がー。」

とある日の午後。分厚い本を片手に森の中を歩くナナシの姿があった。

「田中草だあー？んなもん。ビリにもねえじやねえかー？ヤがー。」

開かれたページには、薬草らしき絵と説明が書いてある。ビリヤ
ら、それを見ながら薬草を探してこむよつだ。

「大体、私には記憶を思ひ出すと使ひの使命があつてだな。こんなこ
とをじてる場合ぢは……」

「ぶつくれと文句を言いながら探すナナシであつたが、一向に目的
の薬草は見つからなかつたのである。

「ダメだ……、今日は諦めよつ。適当に嘘付けばバレねえだろ」

あ、はいはい。薬草なんて見つかりませんでした。

大体、薬草の知識なんざないんだよ。こんな絵が書かれた本だけで探すのは無理だつーの。

つたく、あの婆め！

帰つたら満腹になるまで飯を食つてやるからな。見てろよ、肉を食つ……ん？ 誰だ、アイツ。

私が婆さんの愚痴などを呟きながら歩いていくと、婆さん家の前に誰かいた。

……白髪に身長は私より低い、年老いた老人だ……。

誰だアイツは？」んな森の奥で婆さん以外の人間は見るのは初めてだ。

婆さんは人間嫌いらしいからな。あまりと言つか全くと言つて人間と接しないのだ。

ん？あれ？ そう言えば私は大丈夫なのか？

もしかして私は人間と認知されていないのか！？

ひ、ひでえ。

……だから穀潰しだの。グータラだの。ズボラだの、言われるんだな……。

くそう、私を人間と認めさせいやるー！

そのためにも何か人間として確立してることを実証しなければ！

「はっしょん！」

む……思考が逸れていた。ジジイのクシヤミのおかげで現実に戻れたようだな。

ふむ……といひでのジジイは誰だ？

婆さんに友がいるのは有り得ない。また婆さんを訪問するのも有り得ないだろ。

人間との触れ合いは街の店員とかぐらいしか……。

……ま、まさか、婆さんのストーカーか！？

さつきも言つたように婆さんも時々、街に買い物に出るからな。そう言つことは無いとは言えない。

「、コイツア、特ダネだよ！ストーカーなんて初めて見たぞ！

む？よく考えると、これはチャンスではないか？

そうさーあの怪しいジジイを倒せばいいんだー！そうすれば婆さんも私に感謝して薬草探しをさせなくなる。

うむ、そうと決まれば即実行だ。

ふつふつふ、私は接近戦が得意なのだ。気絶させてボコボコにしてやんよ。

【転影移】

もう少しあくまで、自分の影に沈むとストーカージジイの影へと転移した。

⋮⋮⋮

影へと潜つたナナシは老人の影からぐぶりと姿を現した。一方、小柄な老人はナナシが姿を現したことに気付いていない。

「どうやら気配を感じ取ることができないぐらいにナナシの隠密性は高いようだ。」

小柄な老人は終始、鼻水が垂れてくる鼻を啜つていて。どうやら風邪を引いているらしい。これも気付くことが出来ない要因の一つだろう。

一方、ナナシは影から鈍色な光るナイフを取り出すと、柄の部分を躊躇なく小柄な老人に向けて横薙ぎした。

（氣絶しろ　）

その行為は淀みなく、小柄な老人の首筋に向かつていたが

「マスター危ない！」

「むつ？おおつ！？」

もう少しで首筋に達しようとした時、どこからか少女の瘤高い声が響き、小柄な老人はナイフを寸前で避けることが出来た。

「ちつ」

避けられたことに舌打ちをしたナナシは、後方に下がるつとするが

「あ？」

背後から接近した誰かが剣を振り下ろしていることに気付き、そのまま振り返ることなく

「マスターを狙つた曲者が！」

【ガキン！】

急いで影から出し、もう片方の手に持つたナイフで受け止めた。

ガチガチと銀色に輝く剣と鈍色に光るナイフの鐔迫り合つ音が響く。

（前にはジジイ。後ろにまは……）

瞬時に頭を回転させ状況を理解したナナシは、

「ふつ」

小さく息を吐いて力を抜き、鍔迫り合いに負けたように見せ掛け

「おらー。」

再び体を半回転させながら、勢い良く腕を振り剣を弾き返した。

ガキンっ！といつ宿高い音が響く。ナナシは鍔迫り合いを征したが、油断することなく体勢を取りながら睨む。

「……ガキだと……」

そこにはセリロングの赤髪の少女が居た。髪は三つ編みにしている。

そして上半身に鎧を付け、下半身にはスカートを纏っていた。

また少女は弾かれた剣をなんとか握っているが、手が痺れているのか苦悶の表情を浮かべていた。

「エルザ！」

マスターと呼ばれた老人は少女の名前を言い、お返しとばかりに、
少女エルザは

「エリはお任せをー、マスターを狙つた不届きものは私が排除します
！」

そう言い、弾かれたことによつて崩れた体勢を立て直しながらナ
ナシに剣を向けた。

エルザ vs ナナシ

対峙するナナシとエルザの一人であつたが、対峙する時に流れる
特有の静けさが漂つ前に

「あ？ 不屈き者だと？ ふざけんじゃねえ！ ここは私の家だぞ。 不審
者が！」

そう叫んだナナシによつて戦いは始められた。 ナナシは腰を落と
し、素早く動きながらエルザに襲い掛かる。

「おひよー。」

「くつー。？」

左手で刃渡り15センチほどのナイフを振るい、刺し、時には薙ぐ。

その度にエルザも同様に払い、穿ち、時には避ける。

「はあー。」

「おひよー。」

エルザが振るえ、ナナシも振る。その逆もしかり。

ガキンと何度も打ち合い時折、火花が迸りながら戦いは熾烈を窮め始めた。

(ちつ、拉致があかないな)

だが、まだ序盤であるにも関わらず、勝負が着かないことにイラし始めたナナシは新たに動き出した。

「しつ！」

一度打ち合いを止めると、後方に下がりながら、素早く右手に持ったナイフを投げたのだ。

ナイフの軌跡は真っ直ぐエルザに吸い込まれるように向かっていく。

「むつ」

エルザは突如、飛来して来たナイフを剣で弾き飛ばす。そして再びナナシに接近しよつとした時

「おせえよー不審者ー。」

【影槍ー】

「なつーー？」

ナナシがそう呟えるとエルザの足元に出来た影から漆黒の槍が飛び出した。

【ガギツ】

すると、すぐに何かがぶつかり合ひ、鈍く小さな音がした。

「し、しまつた！？剣が！？」

それはエルザの剣が根元から砕け壊れた音だった。

影から飛び出した鋭く尖った槍が剣の柄を貫き、刃と柄を切り離したのだ。

それを見たナナシは勝負が着いたと感じたのだろう。

不敵に笑い、器用にナイフをくるくると回しながら喋り掛ける。

「格好、装備からして、お前は剣士だよな。剣無き剣士は何が出来る?」

「何?」

「降参した方が身のためだぞ。不審者が!」

「そう言って再び襲い掛かろうとするが

「フヨアリーテイルの魔導士を舐めるな!」

【喚装!】

そうエルザが唱えると、虚空からすうと一本の剣が出てきた。

先程エルザが持っていた剣と全く同じものだ。それを素早く掴んだエルザは剣を振るつた。

「はあ!」

「魔導士だと!?」

余裕を出し笑みを浮かべたまま接近していたナナシは、剣を虚空から出したエルザに驚き、反応が遅れ攻撃を許してしまった。

「ちこーい。」

ギリギリで避けるものの何本か切り取られた髪がはらはらと舞い落ちる。

(あ、危なつ！？)

額に汗を欠いたナナシはエルザに喋りながら睨み付けよつとする。

「まさか魔導士だったとは思わなかつ」「ふんー」「さやぴつー。」

だが、エルザはナナシの言葉を聞くことなく、剣の柄で頭を叩き、いとも簡単に気絶させた。

「…………あー…………」

地面に倒れたナナシはピクピクと動いているが、一時の間は目を覚ますことはないだらつ。

何とも呆氣ない結末の戦いであった。

「全く、申し訳ありません」

「何者かの？ズズツ」

今までエルザ対ナナシを傍観していた老人は鼻を啜りながら近付く。

「分かりません。ただマスターを狙つたことだけは判明しています」

「う～む」

風邪の為だらう。顔を赤くさせ鼻水を垂らしながら悩む老人だつたが、

「あつそつ言えば……ここは自分の家だと言つていきました。しかしここはポーリュシカさんの家のはずです」

（うむう、自分の家？ポーリュシカの？…………まさかの……）

ふと、エルザが思い出した内容に老人が思考しようとした時

「人ん家の前でドンパチとは度胸があるね。マカロフ」

木で出来た家から扉を開けてポーリュシカが出て來た。

その顔は非常に不機嫌そうに歪められている。その姿に老人マカロフは冷や汗を流す。

「よ、よお。久しぶりじゃな、ポーリュシカ。実はの、この小僧が
……」

「その子は私の預かり子だよ。全く、バカな子なんだから。バカに
付ける薬はないからね。そのまま寝かしどきな」

「ほう、お主が子を世話とはのう。いやいやまさか……のう？」

「……あんたも風邪を引いてバカになつたようだね。早く入りな！
風邪なんかで死にたいのかい！」

何か含みのある言い方をしたマカロフに、片眉を上げたポーリュシカはそれだけを言ひ。

そして扉を開けたままイラついたように歩き、家中へと入つて
いった。その背中は言葉通り、早く来いと語りかけていたようだ。

対してマカロフは

「や、そー怒るな。待つのじゃ、ポーリュシカ！ おお、エルザよ、
その子を頼むぞおー」

「は、はい」

慌てながらポーリュシカを宥める言葉を発した後、隣に佇んでいたエルザにナナシのことを頼むと家へと入っていく。

「全く、どうして私が……」

残されたエルザは、はあと溜め息を吐いた。

「あれべうつで氣絶するとは……全く……世話が掛かる奴のようだな……」

氣絶したナナシの顔を見ながらそう呟く。そして、まだ少し痺れる手でナナシの足を掴み、ズリズリと引つ張りながら家へと入つていった。

現在は陽が沈み掛け、茜色に空が染まり始めた時間である。

小一時間前に自室で意識を取り戻した私は、すぐに起き上がり、婆さんが無事か確認しに走った。

痛む頭と体を抑えて……。

すると、すぐに無事な姿の婆さんを発見したのだ。何とか飯は食えるようだ、よかつた。

……しかし安心した束の間……。

『そこに座りな。正座だよ』

『ええー』

すぐに婆さんから事情の説明と有り難くない説教を頂戴したのだが。

理不尽だ！と思いつつも話を聞いてやつていると色々と情報を収集することが出来た。

その中で一番驚いたのは、ストーカー爺さんが婆さんと田知の仲であると言つことだ。

まさか、婆さんに友が居たとは……。私にとつては驚きの何モノでもなく、何度も聞き返していたら呴かれてしまった。

しかし呴くのは酷くないか！ ちょっと10回ほど聞き返しだけではないか！

全く、あの婆さんは短気なんだから、困ったものだよ。

おつと、話が逸れていたな。

ストーカー爺さんの名前はマカロフ・ドレアード言つ。

何か偉い人なんだとよ。確か……フェアリー・テイルだつたかな？ そこの魔導士、ギルドのマスターだそうだ。

魔導士ギルドとは魔導士達の集まる組合で魔導士に仕事や情報を仲介する場所らしい。

まあ私には何の関係も縁もない場所なのは明白だな。

ちなみに、忌々しいが私を接近戦で倒した女は、フェアリー・テイルに所属する魔導士だそうだ。

女の名前はエルザ・スカーレット。年は12歳。

爺さん曰わく将来が楽しみな人物らしい。

そして爺さん達の話を聞いた後、私も自己紹介してやつたのだが、

『『偽名か?』』

と、二人同時に言いやがつた！

偽名じやねえやい！ 本当の名前だ！ 何て失礼な奴らだ！ 確かに考えた時は偽名だつたけど今は違つ！

心で叫びつつ婆さんも何か言つてやれよ。と話を振つたらネーミングセンスがないだの。

普段からグータラしてるからだとか、何故か説教が再開してしまつた。

全く持つて意味が分からぬ。何故あそこから説教に行くんだよ？

私の名前は分かりやすくて最高じゃないか。

婆さんこそネーミングセンスがないのではないか。世の中、間違つていると思うー。

「聞いているのかい！」

「うひと、まだ瀧さんの説教は続いていたのだった。

「うやんと聞いてたひつーのー。」

「……本当かー?……」

「当たり前だらうがー。」

私がそつ答えると婆さんは訝しげに此方を見てくる。全く、失礼な婆さんだ。

「……じゃあ、今までのよつて散発的じやなくて、明日から毎日、薬草採集をしてもらひうからね」

「聞いてないぞー? あぶんつー?」

「やつぱり聞いてないんじゃなーそれに今田頬んだ薬草はだうしたんだいー!」

「しょ、しょれはー」

瀧さんの口から信じられない言葉が飛び出し、驚愕の顔を上げると、ジンタをれてしまった。

「痛くてマトモに喋れない。」

「どうせ見つけ切れなかつたんだから、今すぐ探してきな！」

「ちよつ、わたひのはなひを」

「言いかい。見つけてくるまで戻つてくるんじやないよ」

「さういふ……おひやう……」

言い終わった婆さんは私の言い訳を聞く前に首根っこを掴むと、外へと放り投げやがった！

「いきなりひやにすんだ【バタン】……よ。」

抗議の声を上げるも、その前に扉はぴしゃりと閉められた。

てから今から薬草採集だと！？

待て待て待て、今は夕方だぞ！
もう暗くなつてゐるのに見つけ
れるわけがないじゃないか！？

ナナシを外に投げた。ボーリュシカは溜め息を吐きながら椅子に腰を降ろす。

「面白い子じゃの」

「何が面白いもんさ。毎日、あの調子だよ。子供のお守りは大変さね」

呆れた表情で対面に座ったマカロフにそう答えるとテーブルに置いてある紅茶を啜る。

マカロフは今だに鼻水を啜つていて、風邪はすぐにな治らないようだ。

「大変ならウチのギルドで預かってもよいぞ？」

「駄目だね」

「ん？ 何故じや？」

「あの子は実質、生まれて数ヶ月しか経っていないんだ。言動もしつかりしてないから大衆の中は無理さ。最近ようやく、人間として安定してきたんだ。自分のことも考え始めたしね。だから、あと一年はじっくり育てる必要があるよ」

「しかし、お主と森の中だけじゃつたら成長はあまりせんじやろ？」

年は大体、エルザ達と同じ頃じゃ わりから何世代と遡りせた方がよ
くないかの？」

「……私はギルドに入れるのは反対だよ。……まあ、あの子の意思
次第だがね」

そうポーリュシカとマカロフが話す間にも

『開けろー！ 横暴だあ！』

ドンドンと扉を叩く音が聞こえてきていた。ビタヤリナナシは薬
草採集に出掛けずに抗議をしていくようだ。

そんな喧しい音や声を聞いて、席を離れていたエルザが帰ってきた。
そしてエルザは眉を寄せながら尋ねる。

「うるさい奴だな。あの……ヒカルがポーリュシカさん……

「ん？ どうしたんだい？」

「ナナシと並び名前は本物なのでしょうつか？」

「残念ながら本物や」

「……信じられません……」

「信じようが信じまいが、あの子がそう名乗ったんだ。あの子はナンシ・ネームレスだよ」

「……自分で名乗った……」

その言葉に疑問を感じたエルザは、頭を悩ましながら考えると、一つの答えを導き出したようだ。

「もしかして自分の名前が分からぬ？」記憶喪失ですか？

「さあね。それはあの子に自分で聞くといこう。それとついでにあの子の友になつてくれると有り難いね」

「友……ですか？」

「知り合いは私しかいないからね。かと言つて自分から友を作るような子じゃないからね。どうだい？」

「知り合いが一人しか居ないのは可哀想ですね。分かりました！マスター、少し席を外します」

「おお、行つてくるがよい

ポーリュシカから頼まれたエルザは気合いを入れながら扉へと向かう。

「ん?」

しかし、ドアノブを握った所で何かに気付いた。

さつきまで聞こえていたナナシの声と扉を叩く音が聞こえないのだ。しかも人の気配が全くない。

「諦めて採集に行ってしまったのか。早くいかねば見失ってしまう!」

そのことに気付いたエルザは慌てて扉を開け外へと飛び出して行つた。

「ギルドには入れないよ。でも友は作った方がいいからね。あの子にとっては押し付けがましいけど、これでいいだろ?」

「たぶんの。エルザなら今日中に良き友になってくれるじゃね? 儂が保証するわ!」

「……まあ、あの子を見付けることが出来るならの話だがね……」

「むつ?」

何か含みのある言い方にマカロフは疑問を感じた。

だがポーリュシカが指差す方向を見ると、すぐに答えを見つけたようだ。

「……なんと……」

ポーリュシカの指先は床が示されており、その床には人影が出来ていた。

その不自然で不気味な人影はゆっくりと動き、部屋の奥へと進んでいた。

「あんた、薬草採集は終わったのかい？」

【ビクッ】

その人影にポーリュシカが尋ねると、ぐにやりと人影が揺れる。

「採集して来なかつたら、当分の間は晩ご飯抜きだからね」

そう言われた瞬間

『ナンテコツタイ！？』

そう声を出すと人影は慌てたように扉を抜け、外へ飛び出していった。

「風邪を引いてるとは言え儂も気付かんとは……恐ろしいほどの隠密性じゃな。先程の奇襲と言い、一体何者だったんじゃ？「子供にしては手慣れすぎておる」

「…………。私には、ただの子供にしか見えないね」

唚然としながらズズズッと鼻水を啜るマカロフと、静かに紅茶を飲むポーリュシカであった。

……

せつかく影に潜り、こつそりと自室に帰るという計画を取つていたのに見つかるとは……相変わらず勘が良い婆さんだよ。

ちくしょう！

それにしても齧しは横暴だと思ひ。ましてや晩飯抜きなど残酷に
もはぢがある！

つて、それより早く薬草を見付けねば、暗くなつてしまつた。

急げ急げ急げ！

それから數十分、影の中から取り出した本を片手に探し回つたが、
円円草を見つけることは出来なかつた。

何故だ！ 本に書いてある通りの薬草なんぞ、ビリにもないぞ！
それに似た形の雑草ならあつたが……。

ビリだ！ 圓円草も！

「むつ。 やつと見つけたぞ！ ナナシ！」

「…………」

その時、ガサゴソと音があると、茂みの中から野生の魔物が姿を
現した。

魔物のくせに髪は赤いわ、鎧は着けてるわで、初めて見るな。ど
うやうり新種の赤い魔物のようだ。

「おこー！聞いてこらののかー！」

「いつこの時は無視が一番である。田舎者せたらダメだ。やつをと田舎草を探せ！」

「田舎草やあーー。田舎者あへふべしーー。」

「聞いてこらのかと聞ひてこらだー！」

「ちよひ、こきなつビンタだとー？」

「今日、初めて会つたばかりの人にそれは酷くないかー？」

「クソアマーリキなり何しやがるーー？」

「私の名前はクソアマドロニー。エルザだ。やつを家で教えただろ
うが……」

「えるわー、誰だお前？魔獣エルザさんの間違いではないのかあ？」

「記憶障害がーー！あで酷ことは……全く、じょうがなに奴のようだ
な……思つ出でせんやつだつ」

ん？ 何だよ？ 戰闘準備だと？

おもしれえ！ 私だって女に負けるのは悔しかったんだ。次はボコボコにしてやんよ！

「私は誰だ？」

「え、エルザ様です」

「ちゃんと理解したようだな。ああ、様は付けなくていいぞ。」

「は、はい！」

「それにしても捜したんだぞ」

「硬つ！？」

はつ！？ 今まで何を？

てか、私はエルザ様……ではなく、エルザに抱き寄せられているではないか。何だ、この状況は？

それにしても上半身に装備している鎧が頭に当たって痛い。自宅前の戦闘で怪我した所に当たって非常に痛い。一度攻めかあ！

「痛つ。ちよつ、離せよー。」

「むつ……ああ、いいだろつ。それよりも頭は大丈夫か？記憶は思い出しそうか？」

私を離したエルザは心配そうな態度で語りかけてくる。

「てか記憶喪失だと誰が喋つたんだ！？　婆さんか？　余計なことをしやがって

「おー、聞いてるのか？　今日から私達は友だからな。困つていることがあつたら私を頼るといい」

「何だ、コイツ。私達は今日初めて会つたんだぞ？　いきなり友つてなんだよ。」

「て、てか何だよ、その心配していきますみたいな目はー！？」

⋮⋮⋮

エルザが心配そうに見てくる様子に、調子を崩されたナナシはガリガリと頭を搔く。

「いや、お前に心配される筋合いはないんだが……てか友つてなんだよ?」

「記憶がないというのは大変だろ? それにボーリュシカさんに聞いたぞ。一人で寂しかったそつだな」

「いや、別に……」

「辛かつたな。悲しかつたな。もう私がいるから大丈夫だ」

「何の話だ?」

どうやらエルザの頭の中では、ナナシに記憶喪失かどうか聞く前に答えが出ていたらしい。

ナナシを捜す間に色々と妄想してしまつたよつで、既にエルザの目には記憶喪失者ナナシとして写つていた。

それにプラスして友が居ない寂しさに囚われている少年としても写つている。

どうやらエルザの頭の中で、かなり話が飛躍してしまつたようだ。

「私達が出会ったのも何かの縁だ。記憶を取り戻すことに協力しあうと思つてな」

エルザは胸を張りながらそつと言つた

「これで頭を叩けば思い出すのではないか？いやこれが？いやいやこれだら？」

次々に武器を虚空から出現させて始めた。それを見ていたナナシは

「……こ、殺される……」

身の危険を感じ、顔を真っ青にすると、ガタガタと震え始めた。

先程あつた、しかしナナシは覚えていない戦闘の前に、悔しいと憤っていた姿は微塵も感じない。

いや、戦闘でよっぽのことがあつたのだろう。既にナナシは悔しいさを忘れ、むしろエルザに怯えているようだ。

ナナシが無意識に怯えていると、嬉しそうに微笑んでいるエルザは一振りの巨大なハンマーを手に取る。

「「つむ、まきは」」のハンマーで、ふん！」

そして躊躇なく目の前にいるナナシに頭掛けて振り下ろした。

【バゴンッ！】「危なつー？」

ナナシは当たる寸前に、ギリギリ回避し転がる。元の場所を見ると、見事に地面は凹んでいた。

「……無茶苦茶だ……」

「逃げるなー！」

「逃げるなー！じゃねえよー！殺す氣か！それに頭を叩いて記憶が戻るわけがないだろうがー！」

「大丈夫だ。これは魔法剣の一種だからな。頭に衝撃を与えるだけだ」

「死ぬよー？」

「そうか？グレイは大丈夫だつたぞ？」

キョトンとして聞いてくるエルザにナナシは深く溜め息を吐く。

「グレイとやらが誰かは知らないが、止めてくれ」

「むう、仕方ないな」

「まずは落ち着け。大体、本音を言うとだな。私はな、無理矢理、記憶を思い出そとは思つていなこぞ」

「何故だ？ 大切な記憶があるかもしれないのだぞ！」

「今のはナナシだ。記憶なんぞ、何時か思い出すぞ」

エルザの痛高い声が上がり、それに耳を抑えた後、ナナシはぶつきらぼうに答えていた。

「お前は自分が何者か知りたくないのか？」

「私はナナシなんだ。ナナシ・ネームレスという一人の人間なんだよ

「意味が分からぬぞ！」

「分からなくて結構

それから何度も押し問答があつたが、

「分かった。お前が言つんだ。仕方ない」

結局、溜め息を吐いたエルザが折れ、ナナシの記憶のことば以後、口出しをしなくなつたのである。

「だが、記憶関係じやなくとも困つたことがあつたら私を頼れ。いいな？」

「ん？ いいのか？」

「当たり前だ。困つたら何時でも頼つてくれて構わない。なんせ私達は今日から友だからな」

「友……何時でも頼つていい奴のことなんだよな。分かった。覚えておこう」

「うむ、今日からよろしくな」

「ああ、よろしく」

その返答にエルザは満足げに頷いていると、ナナシが分厚い本を差し出してきて喋り出す。

「ではさつそく。エルザよ、薬草を探せ。円月草だ。いいな？」

「……何?……」

「私は薬草を見つけきれなくて困っているんだ。早く探してこい。あーあと、腹が減った。果物を取つてこい。それに……」

エルザに本を押し付けているナナシは、友のことをパシリか何かと認識していたようだ。

先程の怯えは何のことやら、ナナシは調子に乗り喋り続けたが、その勢いはすぐに止まる事となる。

「明日から私の代わりに薬草を探集しろ。おおそう言えば肩がだるいな。友よ、肩を揉おわつ!?」

「お前は友と言つ言葉を履き違えているようだな。友になる前に教育が必要のようだ。来い! エルザ先生がみつちり教えてやる!?!」

「痛い痛い痛い!? なして!?」

ナナシの言葉に怒りで肩を震わせていたエルザは、ナナシの首根っこを力強く掴む。

「ひり!大人しくしろ!」

そして抵抗するナナシを弓をすり森の奥へと連れていったのであつた。

その後

「只今戻りました」

「友は対等な関係、対等な……」

すつきりとした笑顔のエルザと顔面蒼白で田中草辻手に、ぶつぶつと呟いているナナシが帰つてきたそつな。

「ああ、ナナシ。これから毎週、私が休みの日はレッスンだからな。みつかりお前を鍛えてやる」

「ひいー?」

今まで、ナナシが記憶を思い出したいと言っていたのは、仕事から逃げる口実でした。今回の本筋です。

現在は夜である。

何とか円月草を採取して来た私は無事に夕食を食べることが出来た。

その夕飯中に爺さんから聞いて驚いたのだが、婆さんは何と高位の治癒魔導士らしい。

ただの薬草大好き婆さんではなかつたようだ。まさか、こんな近くに魔導士がいたとは……。

ちなみに、今は夕食も食べ終わリソフラーでゆつたりとしている。

私の後ろには椅子に座つている爺さんとエルザがいる。何でも今夜は泊まつていくんだと。

婆さんは人間嫌いのはずなのが……と夕食中に疑問に思ついた所、爺さんが囁き声で教えてくれた。

どうやら病人には比較的優しいらしい。

ちなみに、別室で今も婆さんは爺さん用の薬を作つてゐため嘘ではないだろう。

ふむ、病人には優しいとは新事実だ。そしてよくよく考えてみると

人間である私がここで生活出来るといつことはだな。

……つまり、つまりだ。婆さんにとって私は病人なのだ……

「ナナシよ。少し尋ねたいことがあるのじゃが……」

信じられない！？ 私は病人ではないぞ！

もしかして記憶喪失のことが病気なのか？

しかし婆さんは散々言つたはずだぞ。私自身は記憶喪失ではないと……。

ちゃんと理解してくれていたはずだつたんだが……それでも私は病人と見られているのだろうか？

「ナナシ…つて聞いておらんの」

「マスター、私がしましょうか？ナナシの扱いは大分理解したつもりです」

「……早いのう。まだ会つて1日も経つておらんぞ？」

「意外に単純な性格でしたので」

「それよつさつきから何をしておるんじや？」

「ナナシの教育を明日から行うので計画書を書いていますー。」

「さつき、ポーリュシカから頼まれたやつか」

「はい。どうせ私も勉強しないといけませんので、そのついでに教えていい」
「うかと」

後で、婆さんにしつかり私のことを伝えておこう。

だが今、動くのは嫌だ。今日の疲れを癒しているからな。

今日は婆さんと会った時並みに忙しかったのだ。久しぶりに活動した日と言えよう。

まあ、こんなにゆつたりとして居られるのは、エルザが薬草採取に協力してくれたおかげだ。

エルザの助言のおかげで薬草を見つけることができたからな。居なかつたら今田はヤバかったかもしれない。

ちなみに、円月草に似た雑草がまさにそれだったのだよ。

あれは驚いたな。本当にエルザには感謝しないといけないな。

ただ、エルザ先生の授業は今夜限りで終わりにして欲しい。あの授業はスバルタすぎる。

「うへ、ずばーん！ と凄く大変だったのだ。

「ずばーんだぞ！ ずばーん。

そしてずどーんだ。

「聞いておるか！ ナナシ！」

「うへ、ずどーんつて

「ナナシ！-！-！」

むう？ 背後にいた爺さんが何やら話し掛けってきたぞ。

「うるさこな。声のトーンを落とせ。婆さんで怒られるが

「よつやくづきおつたか」

呼ばれたので振り返つてみると、案の定、爺さんが此方を見ている。

だが呆れ果てたような顔だ。

ふむ……自分の風邪ひき具合に呆れ果てているのだな。

まあジジイだからな。風邪でぼつぼつ逝く可能性もあるし、風邪を引いたことを反省しているのか。

さて、そんな爺さんよりも気になつたのは視界の端に「」るエルザの方だ。

「むう。ポーリュシカさんから渡される本の量から……やはりナナシには毎日勉強させないといけないようだな」

エルザは真剣な顔で何やら咳いている。

しかし初めてしつかりと顔を見たな。意外に真面目な顔は凜々しくて可愛い……。

はつ！？ 私は何を馬鹿なことを考えているんだ。

あれを可愛いとは私の目は腐つているんじゃないのか！？

そんなことを思考しながら立ち上がり立ちはつてエルザを見てみる。

どうやらエルザはテーブルに大きな紙を広げて何やら書いてみるようだ。

何だか悪い予感がするのは気のせいだらうか。

「お主は何歳じゃ？」

おつと、爺さんと話していたのだつたな。

ふむ、年齢か。して言つなれば一才にも達していない。

しかしまあ、爺さんにあのことを持つても意味はないので……確
かエルザが12歳だったか。ならば私は

「24歳だ」

「何だと!?.有り得ないぞ!..」

むつ。何でエルザが話に入つてくるんだ。しかも何だ、その驚い
た顔は?

「私より身長が低いじゃないか!」

「何言つてんだ。私は24歳だ。てか身長で決めてんじゃねえぞ!..」

「いや有り得ない

何て失礼な奴だ。確かに私の身長はエルザより低い。

しかし、しかしだ。私も成長している。この数ヶ月で130を越えたんだ。エルザなんぞ、すぐに追い抜いてやる！

だから年齢はエルザより一倍の24歳で問題ないはずだ！

「お前はまだ見ても私より年下だ！」

「馬鹿野郎！私は24歳だ！」

「ナナシよ。お主はせいぜい八～十二歳が限界じやぞ。二十四歳はちよつとのう」

ジジイもか!?呆れた顔で此方を見るな!てか

「エルザより年が低いわけがないじゃないか。私をバカにしないでくれよ……」

「何だと！？」

「その自信は一体どこから來るのか不思議じゃのう」

111

その後も売り言葉に買い言葉が続き、言い争いは熾烈を極めた。

何故か意固地になつたナナシとエルザが考えを改めることはなかつたからだ。

「何の騒ぎだい！」

「おお、ポーリュシカ」

だが、薬の調合からポーリュシカが帰つてくると状況は一転した。

「婆さん、聞いてくれよ。私は24歳だよな？」

「いえ、ナナシは私と同じ12歳か、それより下ですーーそうですよね？」

新たにやつてきた訪問者に近づき、絶対の自信を持つて喋り掛けるナナシとエルザ。

だが額をピクピクと震わせていたポーリュシカは一人を冷たい目で見る。

「「「ひつー?」」」

その目を向けられた一人と何故かマカロフまでも小さく悲鳴をあげる。

まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。

「一体、何時だと思つてゐるんだい？」

そう言い放つと躊躇することなく、拳を握った状態でナナシヒルザの頭を叩いた。

「…………痛い…………」「

「夜遅いのに騒ぐんじゃない！」

「ちづえよ。騒いでるんじゃない。私の年齢をだな……

「あなたは1~2歳で決定だ。反論は認めないよ」

「そんないー？」

「それよりもあなたは風呂を掃除してきなー！」

「理不尽だあ

結局、ポーリュシカの言葉でナナシの年齢は決まってしまった。

反抗すれば、『飯抜きが待っていると理解したナナシは逆らえず、落胆しながらと風呂場に向かっていく。

「……私は12歳なのか……」

「やはりな。今回の勝負も私の勝ちのようだ。ふふふ」

一方、エルザは腕を組み、ナナシを見て不敵に笑っていた。
だが

「あんたの方は終わったのかい？」

「……まだです……」

ポーリュシカの手先がエルザに向かうと、タジタジと言葉を喋るだけ。

どうやらエルザもポーリュシカは恐いようだ。

「だったら早くおし。あんたがしたいって言いだしたんだよ

「や、早急に終わらせます！」

そう言つと、急いで椅子に座りテーブルにある紙と睨めつこし始めた。

「さすがはボーリュシカじやな……恐ろしのう……」

そんな一部始終を見ていたマカロフがそう呟く。

だが、まさか自分にも先が来るとは考へていなかつたのである。

「何、ボケツとしてんだい。マカロフ？」

「わ、儂か！？ 儂は何もしておらんぞ！？」

「何もしてないのが問題さ。あんたが居たのにビリーハーの子達が騒いでいるんだい？ ちよつと来な！」

「や、やめつ！？」

ボーリュシカに襟首を掴まれたマカロフは、ナナシのよつに引きずられ部屋の奥へと消えた。

「マスター、ご愁傷様です」

リビングではそういうつづり、ペン片手に手を動かすエルザが居たとか。

喪失者（前書き）

今日は読みにくいと思います。

風呂掃除完了だ！

後はお湯を蛇口から出して待つだけだな。白銀色の蛇口を捻ると勢い良くお湯が出てきた。

木製の浴槽にリズミカルな音を鳴らしながらお湯が溜まつていく。

それと共に蒸氣が舞い上がり、広い浴室に湯氣が立ち込め始めた。

「うむ、湯氣で前が見えない。さつさと別室に移動しよう。

ちなみに、ここのお湯の元は温泉だ。源泉を引いて、直接お湯として使つてゐるため非常に熱い。

だから入るときには注意が必要だ。水を足さなかつたら死んでしまつからな。

さて、そんなことより早く浴室に帰つて瞑想するか。

「むー。やつと出てきた。遅いぞ

「お前、何やつてんだ？」

浴室から出ると、そこにはエルザが佇んでいた。腕を組み、何やら嬉しそうに微笑んだ顔で喋り掛けてくる。

「ふふん 1日だけだが完成したんだ」

微笑む顔が少しだけ可愛いなと思つてしまつたが、コイツの笑顔は恐ろしいことの前触れのような気がするな。

「完成？ 何の話だよ？」

「明日からの勉強の話だ！」

「勉強？ 何だそれ。お前のレッスンなら来週だろ？ （来週は森の奥に逃げよづ）」

「私のレッスンとは違う物だ。夕飯時、ポーリュシカさんの話を聞いていなかつたのか？」

私の返答に対してエルザは微笑みから一転し、憐れみを浮かべたような目で此方を見てくる。何て失礼な奴だ。

「勿論、聞いていたぞ」

「嘘だな」

「聞いていました！」

「じゃあ、ポーリュシカさんが何を言ったのか聞いてみる」

そ、そこまで聞いてくるのか。夕飯時、夕飯時……確かに婆さんは……ああ思い出したぞ。

「風邪を引いてしまった爺さんを怒っていた…ビッグだ、覚えていただろ?」

「……確かにそうだが、それはナナシには関係ない話だ」

そう言ひや否や、エルザは溜め息を吐く

(やつぱり)「イツは1人には出来んな。人の話は聞かない。薬草採取も適当。戦闘も弱い。ふむ……ダメダメではないか!? 鍛えねばすぐに死ぬぞ!?

「私と出合えてよかつたな。明日から一緒に頑張ろ!」

何を言つてゐるんだ。話が見えない……てか肩に手をおくな! 何か子供扱いされていないか?

私とお前は同じ年に決まったのだぞ!

「ではナナシ。明日から始まる計画の概要だけ説明してやる！」

ナナシ教育計画だとー!? あの婆さん! ふざけたことを始めやがった!

何でも一年間、薬学や魔法などの勉強をしないといけないらしい。

私が婆さん無しでも生きれるようにするための措置らしい。

エルザに聞いても、うるさいで、よく分からないので婆ちゃんに直接聞くしかない。

と書つ」と私は婆さんの私室を訪ねるといふだ。

「婆ちゃん、もういいんだよ。」

婆さんがいる私室まで急ぎ、ノックもせずに扉を開けた。

「待て、ナナシ！」

背後からエルザが付いてくるが、部屋に入らせないために扉を無理矢理閉める。

『むっ！ 閉めるな！ 私も……』

何やら声が聞こえてくるが、それよりも燐さんと話をしないこといけないので。

部屋の中には燐さんが一人で作業をしている。薬でも作っているのだひり。

「どういひことだよー 私は勉強なんでしたくないぞー。」

「パークパークつかこ子だね」

燐さんははつとぞつとした表情と態度を露わつとせず、私の方へと振り返る。

「それじゃあ聞くよ？ あなたは何かしたいことあるかい？」

「…………」

私はピタリと腕を止めた。何故腕を止めたのか、自分では分から
ない。

ただ固まつている私に婆さんは続ける。

「この世界に、この時代に生きているのなら何をしたいのかと聞い
ているんだよ。毎日寝て食つてグータラしているあなたは何をした
いんだい？」

「…………飯を食いたい…………」

「それはすることがそれしかないからさ。食事以外に何かしたいこ
とはあるかい？ ああ…………グータラな行動は却下だよ」

「むう」

何をしたい？ いきなり、そんなの聞かれても分からねえよ。

食事は好きだ。グータラするのも好きだ。しかし婆さんは、それ
は駄目だという。

ならば、それ以外に私は何をしたい？

……

う～む

何かしたいこと?

しいて言うならば私は生きたい。ただ、ナナシ・ネームレスとして生きたいだけだ。

私が記憶喪失者なら記憶を思い出したいと思つだろ。

記憶を取り戻したいと躍起になつて、自分を知つてゐる人物を探しにいくだらう。

だが私はナナシ・ネームレスだ。断じて記憶喪失者何て奴ではない。

確かに、この身体の前の持ち主は記憶喪失者なのかもしれない。

ソイツには楽しい記憶があつたかもしれない。

悲しい記憶があつたかもしれない。

何かすべき任務があつたかもしれない。

思い出さなければいけない何かがあったかも知れない。

だが、私には関係無い。

ソイツが誰なのか、何者なのか、どんな人間だったのかなんて知らない。

知らないヤツのことなんか考えようもないのだ。

私は知らない。何も知らない。唯一、この時代と一致するのは魔法と一般知識のみ。

しかし、それはソイツを体現しているのではない。

この知識も魔法も、私が産まれた時から覚えていたものだ。

断じてソイツの記憶じゃない。今考え、生きている私の記憶だ。ゆえに私とソイツは既に別の人間である。

つまり、私が自分の人生を割いてソイツを思い出してもやる義理など微塵もないんだ。

ソイツがソイツ自身を思い出すまでは、この身体は私の物だ。

私のために成長し、私のために存在する身体。

ゆえに私は一人の人間なんだ。

ナナシ・ネームレスと言つ漆黒の背広を纏つた白髪に赤目の人間なんだ。

ソイツは何時か現れる。ソイツが記憶を思い出す」とひよつて……。

その時、私と並び存在はソイツと並び存在に消されて死ぬだろ。

しかし、その時まで私がこの身体の主なのだ。

「今私はナナシ・ネームレスと言つ人間だ！」

まるで自分に言い聞かせるように腕を振りながら私は叫ぶ。
しかし、すぐに疑問が私を襲つた。

じゃあ私は何をしたい？

婆さんの言う通りナナシ・ネームレスは何をしたいんだ？

「もう一度聞くよ。あんたは何かしたい」とはあるかい？」

「……ないかもしない……」

「この世界で、この時代で、私は何をしたいんだ？」

ただ精神的に生活をするのか？ センカベ生きてこむのにて。

しかし私はグータラくあることなどが好きだ。だが、それは婆さんが居てこを出来ることだ。

婆さんが死んだらグータラに過ぎないせゐのだらうか。

いや無理だな。飢え死にや路頭に迷つのは田に見えている。

しかし向をすればいいんだ？ 私は何をしたいんだ？

「やつたことなんかわからねえよ」

私の小さな歯をほお構に無しと、婆さんはふんつと鼻を鳴らし喋り始める。

「まあ、それが当たり前さ。誰もが産まれた時からやりたいことがあつたら苦労はしなことよ。それを知るために勉強をするんだ」

「知るために勉強？」

「やつたれ」

そこで一呼吸置くと再び婆さんは話しあ出す。

「あんたは毎日グータラに過ごしてきただ。やりたいことなんて考えたこともなかつたううね。でもだからこそ、今は理解出来るはずだよ。ただ黙つていても、空を眺めていても、何も進まないことね」

「……じゃあどうすればいいんだよ……」

「わっ あも言つたじゃないか。まではやりたいことが見つかるまで勉強をしてみな」

「……むう……」

「勉強をしておもえすれば、やりたいことが見つかつた時に必ず助けになるはずさ。やりたいことが見つかつた時に後悔はしたくないだろ？だから勉強はしておきな」

「勉強……か」

「わっ あも言つたんだ。一応やれるだけやるか？」

しかし勉強をしたからと云つて、やつたことが見つかるのだからうか？

「やっや、やっや、勉強はあくまで何かしたことを見つかるための猶予期間であり……むう？」

「訳が分からなくなつたぞ？」

そう言えば、この勉強は私が独り立ちできるようになるためのものなんだよな。

つまり婆さんが言つたのは勉強すれば何かしたいことが分かるかもしれないことを言つこと。

だから勉強をしておけば、婆さんが居なくても路頭に迷わないかもしない。この時代で生きていく。

そう言えども、この時代は知らないことばかりだ。

この森が大陸のどこにあるかも知らないのだ。

私は何も知らない。そのため、何も知らないから勉強するんだな。

うむ、そうだな。まずは勉強をしてみよう。

知識や魔法を貪欲に習得して独りで生きれるようにならなければいいじゃないか。

やうすればやりたいことも見つかるだらう。この時代で私は生きて行くことができる。

グータラに生きる」とは何時でも出来るしな。

一年ぐらい頑張ってみるか。

：

：

：

婆さんに礼を言った後、すぐに部屋を出た。

決めたら即行動だ。やるならしつかりとやらなければ。

「エルザ、明日から私は頑張るよ

「や、そうか（部屋で何があつたんだ？別人のようじやないか！？）

「

「ああ、よろしく頼む」

何やら驚いているエルザはさて置き、計画書をあらうと見るか。

何をするか見ておかないとな。

何々、朝は知識系。昼は運動系。夜は薬学系と言つたところだな。

ふむ、ふむ、なるほど。

つまり自由時間は食事と風呂と寝る時だけと言つことが。

よし明日から

「やつてられるかあー！？」

こんな紙切れなんぞ、どつかに飛んでいけー

「あつ！ 私が書いた計画書を投げるなー！」

「ああ、紙に皺が。せつかく綺麗に書いていたのに……ナナシのバ
力……」

「なあ？ エルザ」

「……なんだ？……」

紙切れを拾い、少し涙目になつてているエルザに……何で涙目にな
つているんだ。

まあいいか。とにかく私はエルザに問い合わせた。

「どれか減らさないか？ 私は何かを見つける前に過労で死んじまうよ？」

「駄目だ。絶対、計画書通りやるからなー。」

「絶対？」

「絶対の絶対だ！ お前は男だろ？ 一度決めたことは貫き通せー。」

「うへえ」

明日から大変な日々が続きそうだ。つむ、辛かつたら逃げることにしよう。

喪失者（後書き）

補足

ナナシは記憶喪失者とは別の存在と考えている。いや考えたいと言ひ話。

それと混乱しながらもポーリュシカに言われた通り勉強を頑張ろうと思ひ立つた話。

読みにくかったですよね。混乱の描寫は難しいです。

記憶関係は今回で一端収束します。

展開遅すぎますかな？

使い

私が勉強をすると決意した次の日。

既に時間は夕方である。私とエルザは森の開けた場所で休憩を取つている。

地べたに座り背後にある木に寄り掛かり半日の疲れを癒やす。今日は大忙しだったからな。

早朝、気持ち良く寝ていた私はエルザに馬乗りをされて目を覚ました。

腹にエルザの全体重がのしかかり破裂するかと奇声を上げたのは苦い思い出だ。

早朝は婆さんに頼まれた薬草採取をエルザに手伝つて貰いながら終わらせた。

それが終わると初めての勉強開始だ。

朝は知識系と言つことで、婆さんが用意した本を読み進めるのが勉強内容だ。

最初から難解な話が多く頓挫しそうだつた。

だが、ここで救世主現れる。

そう、今日はエルザがいるのだ。そのため口頭で教えて貰いながら本を読み進めることができた。

本の内容は魔法界のあれこれ。

私もギルドには所属していないものの、一応、魔導士の端くれである。

そのため魔法界をしっかりと理解していなければならぬらしい。

例えば、魔法界の頂点は評議会であることや、その評議会に従わないギルドなどの話だ。

たぶん一人で読んでいたら分からぬことが多いただろうからエルザには感謝している。

ちなみにエルザが来るのは週に一回か二回ぐらいなので、分からぬところがあつたら婆さんに聞くしかない。

おおっ。そう言えば、この東の森の位置する場所が分かつた。

大陸西側、フィオーレ王国のマグノリアと言つ街の近くにあることらしい。

これまたエルザへの質問で分かつた。エルザ様々である。

それにしてもフィオーレ王国は知っていたが、場所や街は知らなかつたので何だがスッキリ。

それにエルザが所属するギルド、フェアリーテイルもマグノリアにあるらしい。

うむ、新事実ばかりだ。エルザの次は勉強様々という奴であるな。

知らないことを知るのは、何だが気分が良いものだ。大変でキツいと考えていたが、意外に勉強は楽しいものであることを認識した。

それに今回は頑張ろうと意気込んでいたためか、意外と早く昼になってしまったよ。

知識系の勉強は為になることばかりだ。今後も頑張ろう。

しかし、次の運動系が問題だった。

内容は殆どが、その名の通り運動ばかりだ。

ランニングや腕立てなどキツすぎる。挫折物ぞ！

考えてみれば私は生まれてから運動らしい運動をしていないのだ。

腕立てなんか30回が限界。走るなんてとんでもない！？

先程まで親切に勉強を教えてくれていたエルザが鬼に見えたほどだ。

逆に運動系の後半、魔法練習は楽しいものであった。

やはり魔法を使うのは良い。使う度に体の活力が湧いてくる。

エルザにそれを言うと不思議がっていたが、何だが魔力の巡りが良くなるのだ。

運動系は前半地獄で、後半天国だな。

婆さんが設定してくれた最低限の運動とナイフの練習を終わらせてから魔法練習を多めにやってみるか？

「ナナシ。暗くなつてきたから、そろそろやめだ

おつと、忘れていた。エルザと模擬戦をするのだった。

休憩は終わりと叫びしことか。

「ほら、早くしないか」

何時の間にか横に立ち、手を伸ばして催促するエルザ。

その手を握り立ち上がる。

……柔らかい手だ……」の手で扱う剣に私は負けたのか……むう。

「ナナシ?」

「あ、ああ。始めようか」

ずっと掘んでいたのかエルザは訝しげに此方を見ていた。すぐさま振り払う。

「むう。ちょっと乱暴ではないか?」

「柔らかいお前が悪い」

「え?」

眉を寄せた顔からキヨトンとし始めたエルザは置いておこう。

さて、エルザとの模擬戦は勉強の一部ではない。レッスンの一部だ。

エルザが言うには私の力量では魔導士として食つていけないらしい。

……失礼な奴だ……。

もう一度言おう。実に失礼な奴である！

今日はこそ、エルザを倒したい。過去一回は惨敗だったからな。

今回は華麗に倒して撤回してもうおつ！

そう気合いを入れた私は少し離れたエルザと向き合つ。

エルザは虚空から剣を。私は影からナイフを取り出した。

「何故ナナシはナイフを使うんだ？不思議だ。私が考えるにコイツ
は……」

ん？何ぶつくも言つてんだ？まあいいか。

それより模擬戦開始だ。

一見、理性的で可愛い風貌のエルザだが、侮ってはならない。

エルザは恐ろしい女で、私の得意な接近戦で全く勝てなかつたのだ。

前回のように浅慮かつ本能的な反応はダメだ。

「ナナシ、それでは始めるぞ」

「ああ」

ダメだ、ダメなんだ。分かっている。しかし、残念ながら私にはそれしかできない。

だが、それでも勝つてみせよう。

「「行くぞ！」」

：

：

：

東の森にある木々が切り倒された小さな広場には一人の人が居た。

エルザとナナシの二人だ。

二人はお互いの手に持った剣とナイフを振り回し戦いあつてゐる。

お互い真剣な顔をし、模擬戦と言つより実戦に近い雰囲気が辺りに立ちこめていた。

何も喋らずに二人は斬り合い、辺りには剣とナイフがぶつかり合う音がするだけだ。

運動が嫌だと宣っていた割には、ナナシはよく動く。

小さく軽いナイフの利点を生かし何撃もエルザへと刺し、薙ぎ、穿つ。

しかし、その全てはエルザが握っている剣によって防がれていた。ギリギリ防がれているのではない。余裕な動きで防がれているのだ。

「だあ！ 何で当たらないんだ！」

剣とナイフの激突は何回も続き、状況に展開がないためナナシは苛つき始めていた。

一方、エルザは沈黙を守り、ただ無言でナナシとの戦いを続ける。エルザの目はナナシに向けられているが、ナナシの闘志溢れる目とは違い、冷めた観察する目だ。

しかし勝つ意志がないわけではない。

ナナシの一手一手を見ながらも、的確に勝つために一撃ずつ斬撃をナナシへと打ち込む。

そして、今までにない一直線に鋭く振り下ろされた重い一撃がナナシを襲う。

「ぐうーー？」

「むひ、やるな

それをナナシは受け止めた。エルザは自身が出した斬撃をナナシが受け止めたことに感嘆の声を上げる。

だが、ナナシはその一撃をナイフで受け止めるのが精一杯だったようだ。体勢を崩し掛けている。

「ふむ、防護は並か

その体勢のまま何やら呟いたエルザは、再び素早く剣を振るつた。しかし、結果は空振り。その理由はナナシが素早く後方へと下がつたからだ。

だが足で素早く下がったのではない。足は踝まで自身の影に沈んでいる。

「影魔法か

あまり動搖せずに、エルザはナナシの背後にある木々を見る。

何時の間にか木々には、ナナシの影から飛び出た漆黒の手が絡まつっていた。

「御名答ー。」

不敵に笑うナナシは漆黒の手に引っ張られながら後方へと勢い良く下がっていく。

【影槍ー。】

そして離れると共にエルザの影から漆黒の槍を突き上げた。

「あまいー。」

だが、エルザは分かつていたかのようにヒラリと横に避ける。

「同じ手は何度も効かないぞ！ ナナシー。」

【黒羽の鎧ー。】

エルザは一瞬で違う鎧に換装すると一気に踏み出す。

どうせ今までは馴らしだつたやつだ。

たつた数歩でトップスピードに乗つたエルザは、後方に土埃を巻き上げながらナナシに近付く。

一方、ナナシは

「あー！ すりー！ ？ 違つ鎧とかあるのかよー？」

そう叫びながら片手を上に向けると、すぐにエルザの方向へ降ろした。

【四つ闇！】

突如としてナナシの背後から、無数のどす黒い三田円型の何かが出現。

何かは勢い良く回転するヒナヒシの似図と共にエルザく飛び出す。

それは影で出来た刃。鋭く何者でも切り裂きそうな刃であつた。

どす黒い三日月型をした刃は縦横無尽に動きながらエルザへと迫る。

「やはづー」

一方、ナナシの魔法を見て何かを確信したエルザは影の刃を切り裂きながら喋る。

「ナナシー、端、戦闘を止めろー！」

しかし戦闘に集中しているナナシが聞いているはずもない。

エルザが影の刃に気を取られて、ついに再び攻撃を仕掛ける。

【影槍！】

「むつー！ナナシの奴。話を聞いてないなー！」

足元から出てきた槍をギリギリで避けつつも、迫つてくる刃を相手にするエルザは苦悶の声をあげた。

おっ！ 四つ闔と影槍を出したらエルザの動きが止まつたぞ！
これはいいコンボかもしれないな。

よし！ 今のうちに接近してナイフで倒してやんぜ！

「昨日の雪原晴らしてやうあー！」

気合いを入れて地面を蹴り走り出す。もう体力が限界だ。全身がガクガク震えているよ。ナイフなんか取り落としそうだ。

でも頑張れ私！

エルザは今だに佇んだままだ。

エルザまで距離ゼロ！ よし、行ける行けるよ！ 私の接近戦をトクとみよ！

「へり……え？ 拳が目の前

「エルぶはあー！」

「お前は人の話を聞けと何回言つたら分かるんだ！ 馬鹿者ー！」

「鼻が！？ 鼻があ！？」

私が心中で反省会をしてると、エルザが何やら話し掛けでき

「あれ？ 本当だ」

「もう止まっている」

「抓るな！ まだ鼻血が出てるんだよーーー？」

「ナナン」

「痛つ！」

エルザを倒すまで後少しだったから……どうやら体力が続かなかつたのが敗因のようだ。

運動は地獄だが最低限の体力は付けよ。

鼻血が止まんないや。

まあ、今回は惜しかったな。

結局、負けちやつた。

：

：

：

た。

つて、話しかけてきたとか生易しい物ではない。顔を、しかも鼻を抓つてきやがつた！

「てか私のプリティーフェイスになんて」と一。

「……三度の戦闘で感じただのだが……」

え？ 無視？

しかも三度じゃねえよ。一度の間違いじゃ

「お前は完全に中距離型の魔導士ではないか。何で接近戦なんてやつているんだ？」

何だ、コイツ。また意味分からねえこと言つてんだ。

手に持つたナイフをクルクルと回しながらエルザに問い合わせる。

「おまつ。どうみたら私が中距離タイプなんだよ。見てみろよ。このナイフの上手な回し方。ナイフ使いナナシとは私のことだよ？私は接近戦タイプの魔導士だ」

「ナイフ使いナナシ？ ポーリュシカさんが名付けたのか？」

「いや。ちげえよ？」

「む？ お前は昨日までポーリュシカさん以外知り合いは居ないんじゃなかつたか？」

「ああ。そういう」

「じゃあ誰が言つたんだ？」

「私だ！ ナイフを使った接近戦は大の得意なんだ。今日は負けたけど今度は勝つぞ！」

「……聞くが、その接近戦が得意なのは何故だ？……」

「家に出てくる黒い奴には連戦連勝なんだ。エルザに負けたのが初めてだ」

「……はあ……」

何か溜め息吐かれた。てか何だ、その呆れた顔。

「お前は接近戦はしない方がいいぞ」

「はあ？ 意味分からねえ」

いきなり何を言つたかと思えば、やれやれな奴だな。

そう考へ、肩をすくめていると、グイッとエルザが近付いてきた。
やはり可愛い。こんな女に私は負けたのか。

「いいか？」

「な、何だよ」

「お前はナイフ使いじゃない。ナイフの使い方は素人だ。適当に振り回しているに過ぎない。といつかナイフ使いは魔導士ではないだろ？」

「え？ 嘘だ。エルザだつて剣を……」

「私は魔法剣だ。ただの剣ではない」

わ、私のナイフだつて森で拾つた奴だぞ！ 聖なる東の森に落ちていたから何かが宿つているはずだ！

てか大体、影魔法は補助にすぎない。私の華麗なるナイフ捌きがあるからこそ、その補助として使えるんだ。

そのことを懇切丁寧にエルザに説明してやる。説明中、鼻から垂れてくる残りの鼻血対処はエルザがやってくれた。

説明を聞き終えたエルザは私の鼻を摘みながら尋ねてくる。

「ちなみに影魔法は幾つ覚えていいんだ?」

「二桁以上だ!」

そう血身満々に言いうと再び溜め息を吐かれた。失礼な奴だ。影魔法は使い勝手がいいんだぞ?

「いいか、ナナシ?」

「あ? あんたよ」

「さつきつ言いおひ。お前は影使いた。それに中距離型の魔導士だ」

え? まだ言つてんのかよ。

⋮ ⋮

あれから数時間後、私は自宅へと帰つてきていた。そして現在は

婆さんから薬学を教えて貰つてゐる。

教えて貰つてゐると言つても、これまた本を読むだけだ。だが、本を読むだけでなく、その内容を一字一句覚えないといけないらしい。

薬は一つでも手順を間違えるとヤバいことになるらしい。ましてや人に与える薬は細心の注意が必要なのだと……。

まさか、夜が一番ハードだとは思いもしなかつた。朝と昼で体も頭も悲鳴を上げている、休憩したいよ。

ちなみにエルザ達は帰つ

むつ。そう言えば思い出した。エルザ曰わく、私は接近戦はダメダメらしい。

ましてや補助の影魔法の方が主体だなんて言つたから、チャンチャラ可笑しいアドバイスだったな。

私はナイフ使いナナシだ！

今は勝てなくとも勝てるように頑張れいいじやないか。

わうわー、よしー、明日からナイフの練習を

「……あんた、薬草の種類と配合は覚えたのかい？」

「……まだ……」

「だつたら卑くおじー。」

「あー」

その前に今田は寝れるのだらうか……。

ヘルザよつスバルタすぞるよー 濃さん！

使い（後書き）

次は半年後まで飛ばす予定。

半年後

毎日は経ち、私が勉強を始めて半年が経つ。

この半年の間に私は色々と成長することができた。知識は十分に蓄え、エルザよりも知識量は多くなった。

今ではエルザが『頼む。教えてくれ!』と泣きついてくるほどだ。婆さんは、治癒魔導士として認められ、巷では治癒魔導士ナナシとして活躍!

そして! そしてエルザとの模擬戦は全戦全勝! これまたナイフ使いナナシとして有名だ!

もう笑いが止まらない!

HAHAHA! HAHAHA!

HAHAHA! HAHAHA!

……と言つ夢を見た……。

テンションがた落ちだ。

半年だ。半年でそんなに成長するわけがないだろ?!

……夢の中の私は馬鹿野郎か……。

しかし期間だけは正しかったな。確かに半年は経つた。

そして現在は深夜のはず。私は自室にて薬学の勉強をしていたはずだ。

だが途中で力尽き、机に突つ伏して眠りこけていたらしい。

つたく、体がバキバキだ。早く今日の勉強を終わらせて寝ることに……え？

「嘘だろ？」

立ち上がり、体を伸ばした私の目に信じられない光景が写ったのだ。

「……窓の、窓の外が明るい……だと

窓の外は暗闇ではなく、青く染まり始めていた。深夜ではない……早朝だ。

最悪だ。最悪すぎる。もう起きる時間ではないか！ 寝た気が全くしない。

「や、いやいやー、まだ寝れるはずだー、後少しづかく時間は残つている。」

「うう。ベジタ。」

早く寝て今日の勉強に備えないとー。」

：

：

（数十分後）

「ナナシー、朝だぞー！」

肌寒い早朝の時間。誰かの音高い声が部屋に響き渡つた。

「…………あー？…………」

そのことにより熟睡していた私の意識は無理矢理、浮上させられたのだ。

「起きるー。」

「誰だよ。非常に煩いし、今の私はベッドでふかふかの布団を被り睡眠中なのだ。」

「…………出でいけ…………」

「何だとー。お前のために朝早く来たんだぞー。」

「うるさいぞ。誰かは知らないが、私のために朝っぱらから活動しているのなら、現状を見てみろ。」

そして何が私に取つて最善か判断しろ。」

「聞こえてるのかー！」

「…………出でいけ、馬鹿野郎が…………」

「むづ、せつかく来てやつたのに仕方ない。また馬鹿にになるか起きろー！バカナナシ！」

「…………起きねえよ。馬鹿やべえー！？ な、何だー！？ 敵かー！？」

「よひやく起きたか」

「つー、あれ？え、エルザ？なして？」

「……………？」

気持ち良くなっていたはずの私の上に何時の間にか、魔獣エルザンが馬乗りになっていた！？

「、そんなことは有り得ないはずだ。」

今週分のレッスンは終わったはずだ。つまり来週まで、エルザはこの森には来ないはずである。

むひ、なるほど。答えがわかつたぞ。つまり、つまりだ。

「…………夢か…………」

何とも不思議な夢だな。腹の上に跨るエルザの温かい感触まで表現されていふとせ……。

「夢じやない一起あらー。」

ふむ、それにしても女と並びのは、じつじつこんなに柔らかいのだろうか。実に不思議な生き物だな。

いや柔らかこと並び表現では表せない。やわやわだ。やわ、やわや「起きるー。」

「あふんー？」

ぐおおおー？ ピンタの感触まで再現されてるだとかー？

「まだ起きないか。往復ならどうだ？」

夢にしてはやつす「あふふふふー…あにすんだー痛えだろ？がー…」

「ふー、やつと起きたよつだな」

⋮

⋮

⋮

夢じやない。夢じやなかつたんだ。

今私は鎧を着けていない普段着のヒルザに馬乗りにされている。
そして両頬がこれでもかー！ と真っ赤になつて、真っ赤になつて、
る状況だと思ひ。

「おせよひ、ヒルザ」

「ああ、おせよひ。あひと挨拶出来るよつたな。感心感心」

「……でも頬が痛い……」

「起きなかつたお前が悪い」

「もう少しちよつと穏便に起こしてくれよ」

「それにしても部屋が汚すがいる。一昨日、掃除したのに何でこんなに散らかっているんだ?」

「え? 無視された? てか……今日は黒か。つむう。

「エルザよ。毎回、人の腹に乗るのは止めろよ。それに見えてるぞ。恥ずかしくないのか?」

「お前に見られても恥ずかしくもなんともない」

「お?」

「ひ、ひでえ。これでも私は男だぞ!? もう少し恥じらいを持つた方がいいのではないか……。

「そんなことより、この部屋の状況はなんだ!」

馬乗りになつたエルザは、そのままの格好で尋ねてくる。エルザ

が詰つ部屋の状況とは、上の血圧のようだ。

現在、部屋の状況は薬学の本や薬草がいたるところに散らかっている状況だ。

足を踏む場所は……探せば見つかる。

「む、何時もと変わらないな。どこが汚いのか分かんが付ければめんどくさい。てか最近は

「婆さんの薬学が忙しいから片付ける暇なんてないんだよー。」

「む、また詰じやねえよー。本當のことでー。」

「詰じやねえよー。本當のことでー。」

やつ、本當にさして。今の私は毎日が忙しいのだ。最近は勉強の途中に寝るとなんてザラだ。

今日も何時の間にかベッドに入つてた。本當に不思議である。

セイ、エルザのレッスンと婆さんの教育が始まつて半年が過ぎてこる。

「数ヶ月で私の生活スタイルはがらりと変わってしまったのだ。

早朝の睡眠が薬草採取に。

朝の森林浴が、青空教室に。

毎のベッドで「ゴロゴロが、大地で汗水流す運動に。

はたまた夜の瞑想時間が薬学の勉強時間に変わった。

エルザと出会いから毎日は大忙しだ。いや大忙しどと言つ葉を越えていると思つ！

食事や風呂、寝る時以外は勉強ばかりで、私は数ヶ月前のグータラな生活が恋しくてしょうがない。

だが、まあ勉強すること事態は意外に楽しいものであった。特に朝の知識系は面白い。

最近は知識量も増えてきて本をスラスラと読めるのだ。それに運動の方もなかなか好調だ。

婆さんが設定してくれた最低限の体力作りは出来るようになった。

「キロのランニングなんて楽勝だぜ！ だが一キロは無理だ。その後のナイフの練習と魔法の練習もしっかりやつている。

しかし、しかしだ。残念ながらエルザとの模擬戦では勝つことが出来ていない。

だが、まだ半年だ！ 何時かエルザに勝てるよう頑張らねば！
ちなみに影魔法はかなり連度が上がった。補助のくせにナイフ術
より上手く扱えるとは……。

それもエルザから見たら異常な成長を遂げているらしく

『接近戦を止めろ！ 馬鹿者！ 影魔法だけ使え！』

と、エルザが怒鳴つてくるのだが、そんなことさせどもい！
私はナイフの練習を頑張るつ！

エルザのレッスンと朝と毎の勉強は楽しい。半日は充実している。
実している。しかし夜が最悪だ。婆さんの薬学が大変なのだ。

おっと言ひ直そう。

エルザのレッスンと朝と毎の勉強は楽しい。半日は充実している。
だが薬学が辛いのだ。

薬学は薬草の種類、配合など色々と覚えることがある。それに最近は、薬を自分で作っている。

だが、作った薬は自分の体を使って実験をするため、体調が悪くなることもしばしば。

婆さんはエルザ以上に鬼畜だったのだ。毎日、課題も出る。もつ大変すぎるよ。

これらが適度な勉強時間だつたら楽しく興味深々に出来たのだが……変更はしてくれない。

つまりだ！

「毎日が、特に夜が忙しいから片付けなんて無理だ……」

「本当に勉強はやつているのか？片付けをサボりたいから言つていいのではないか？」

「やつてるだらうが！毎日大変なんだぞ！」

「皆、大変なんだ。お前だけが忙しいんじゃない」

そう言つと馬乗りになつてゐるエルザは体を傾かせ、私の胸に手をつく。

そして呆れた顔から少し微笑んだ顔、つまり可愛らしい顔をグイツと近付けてきた。

「何時も言つてゐるだろ。私も頑張つてゐるんだ。ナナシだつて頑張れ」

「…………わかつてゐるよ…………お前は何時も手厳しいな」

「それぐら」言わないと理解しないだろからな

「む」

エルザの言つ通りだな。愚痴を言つのは、もう止めにしきつ。

エルザだつて頑張つて強くなつてゐるのだ。私も愚痴を言つ暇があつたら頑張る。

と、毎回エルザの顔を見ると考へてしまつ。コイツヒーると、また頑張ると言つ気持ちになるのは不思議だ。

それにこの半年で、私はやりたいことが見つかつたような気がする。

毎日勉強して、時々エルザと模擬戦や、エルザ達同世代の奴らと会話したりと充実した毎日を送つてゐた私は、やりたいことが見つかったのだ。

それは些細なもので、ただ充実した毎日を送りたい……とこうものだ。

本も読みたいし、魔法も使いたい。『ご飯も食べたい。強くもなりたい。つまり何でもやりたいのだ。まあ大変でキツイのは嫌だが……』

しかしなあ、充実した毎日とは曖昧すぎる。まだまだ半年しか経っていないからな。

もひとつ色々と考えてみよう。

「それより時間だ。早く行かねばボーリュシカさんに怒られるぞ」

私がから離れたエルザは床に落ちている本を一ヵ所に積み上げながら、言葉を紡ぐ。

「ほら、早く起きないか。朝ご飯を食べたら片付けをするが。その後は薬草採取を手伝つてやる」

「へいへい」

既に意識は覚醒してこるため、すぐさま起き上がる。

薬草採取は手伝って貰わなくてもいいが、エルザとこると和むから問題ない。

それにしても、何だが子供扱いされているようで釈然としないぞ。

てかそんなことより

「何でいんだよ。明日から仕事があるんじゃなかつたのか？」

「何だ？ 来てはいけなかつたか？」

「いや、来るのはいいが……仕事の準備はいいのか？」

「仕事先はここなんだ」

「ここ？」

「お前を街に連れて行く

「何！？ ついに街デビューか！？」

おおつーー だからエルザが居たのかー

「ああ、私も覚悟をしないとな」

ん？ 何で疲れたような顔をするんだ？

まあいいか。エルザは放つておいた。だって街に行けるからな！
いやあ興奮物だ

なんせ私は街に、いや人里に降りたことは一度もないのだ。婆さんから止められていたからな。

しかし、つい最近、エルザの付き添いが条件で婆さんから許可が
降りたのだよ！

何時になるか楽しみに待っていたのだが、まさか今日だとは……。
しかし嬉しいぞ。これでナツ達にも会いに行けるじゃないか。今
まではあっちから来るだけだったからな。

よし、婆さんから小遣いをたっぷり貰つてマグノリアに突入して
やる！

半年後（後書き）

今回は半年まで一気に飛ばしましたので、これから半年掛かるまで
数話使い予定です。

マグノリア

空は雲一つなく陽光が澄んで、すがすがしい昼間。

マグノリアの街は昼間であることもあり、活気に溢れている。特に商業区は多くの人が行き交い活気に溢れていた。

通りには様々な店がある。どの店も綺麗に手入れされており、何軒かの店では客が入って賑やかに買い物をしている。

そんな一つの店から真新しい漆黒のステッスを着たナナシとエルザが出て来た。

「背広の新調をしなきゃならんかったのか。道理で婆さんが街へ行くことを許可したわけだな」

店から出たナナシは通りを歩きながら、自身のステッスを触る。

「お前も身長が伸びたからな。そろそろ換え時だつたんだ。丁度よかつたではないか」

「エルザは抜いたからな。全く持つて自分の成長期が恐ろしいぜ」

ナナシは不敵に笑いながら左手をエルザの頭と自分の頭を行き来させた。一方、エルザはむつと、ふてくされた表情に変わる。

「ちよつとではないか。まだ私が負けたわけではない！」

「無理無理、私はドンドン伸びるからな～」

「むつー。」

「」の半年で身長が伸びたナナシは遂にエルザを抜いていた。今日のマグノリアデビューは新調したスーツの受け取りのためであった。

真新しいスーツを着たナナシは嬉しそうに街を見渡す。

「それにしても街は色々な物があつて面白いな。見ろよ、人がわんわかいるよー。」

「そうだな。それに今日は仕事が休みの人も多いから普段より多い

「おおーなるほどー。」

ナナシはキョロキョロと辺りを見回しながら歩く。一方、エルザ

はハラハラとした面持ちでナナシの袖を掴んでいた。

家を出る直前、ポーリュシカにナナシを一人にしないよう、口を酸っぱくして言っていたのだ。

エルザはポーリュシカに言われずとも、ナナシを一人にするつもりはなかつた。

「楽しいのは分かる。でもいいか。ナナシ？」

「ん？ あんた？」

「頼むから今度は居なくなるなよ？」

「一人にさせるつもりはなかつた。だがナナシは、既に一度エルザの前から姿を消していたのだ。

「大丈夫だ！ 私を誰だと思つていい！」

「……だから信用ならないんだ……」

ナナシが消えたのは到着してすぐの朝のこと。エルザが街の様子を眺めている時。

朝早くナナシを迎へに行つたエルザは一瞬、眠気に襲われ欠伸をした。

だが、その欠伸がいけなかつた。何故なら欠伸を終えたエルザが、ふと横を見た時にはナナシは居なかつたからだ。

『馬鹿者があー!?』

エルザは必死に走つた。ナナシを探しに。そして懸命に探し見つけた時には既に脣。

賞金付きの大食い店から満足そうな顔をしたナナシが出てきた所を確保したのだ。

『ちょっと金が欲しぐふうー!?』

『探したんだぞー!』の馬鹿者ー!』

『や、やめつー!?

店から出て来たところを取り押さえたエルザは、ナナシをしこたま殴つたそつた。

『次は絶対にエルザから離れねえよー!約束だー!』

『……はあ……信用できん』

時刻は昼過ぎ。

ナナシの街デビューは始まつたばかりだ。

.....

ナナシとエルザの二人は街の通りを並んで歩く。

エルザはナナシの袖を掴んでおり、肩が当たる距離まで近付き歩いている。端から見れば仲の良い子供達だ。

実際はナナシが逃げないように握つてゐると言つ真実があるので
が、口にしない限りそうは見えないだろ？

そんな二人は街の人々に微笑ましく、はたまた小さいカップルとして憎たらしげに見られながら歩いていた。

街の風景を嬉しそうにキョロキョロと見るナナシ。そのナナシを見ながらエルザはふと気付く。

「 そ う 言 え ば 髪 も 結 構 伸 び た な 。 結 ば な い の か ？」

「髮？」

話し掛けられたナナシは街を見るのを止め、エルザに手を合わせる。

一方、エルザはナナシの長く純白に光る髪を撫でる。

「ああ、そうだ。結構伸びてきたからな。切るか結ぶかした方が良くないか?」

「確かになあ」

そう言つナナシは深く考えてなごうに氣のない返事をして自身の髪を前髪を触る。

1/2の半年の時間にナナシの髪は背中の中間辺りまで伸びており、無造作に下ろされていた。

「短く切るならここに場所を教えてやるが?」

「いや切つはしねえよ」

即答したナナシは端正に整つた顔と涼しげな眼に似付かわしくないやうとした笑みを浮かべる。

「エルザ知ってるか? 髪には魔力が宿るんだそうだ」

「ほう、初耳だ。誰から聞いたんだ？ ポーリュシカさんか？」

「いや。東洋の神秘という本だ。東洋は凄いんだぞ！ 色々と勉強になることが多いくてな」

そう誇らしげに頷くナナシは何かを思つように口を開じ始めた。そんなナナシを見てジト目の中は溜め息を吐く。

「……また眞睡ものの本を読んだな……」

「東洋は素晴らしい！」

「ふむ、髪を切らないなら結んだ方が良いだろつ。髪留めを買いに行くか。次は左だぞ、ナナシ」

「それにな、東洋には忍者と言つナイフ使いが居てな……」

「またコイツは話を聞いてないのか」

ナナシの様子を見たエルザは拉致が飽かないと考え、袖を引っ張り歩く。

「忍者ナイフの名前がクナイとか言つ物で……」

「それなら魔法剣の一つにあるだ。珍しくもなんでもない」

「なんとー?」

「……私の声が聞こえているだと……お前の耳はどうなっているんだ！」

エルザは袖ではなく、ナナシの耳を引っ張り歩く。

「痛い痛い痛い！？」

それから數十分後。

辺りは人の手で整えられた木々が並んでいる。木々の間には石畳の大通りが広がっていた。

その横には石造りや木製の建物が出来ている。その建物の一つにエルザとナナシがいた。

ナナシは先程の無造作に下ろした髪ではなく、銀筒の髪留めで結んでいる。首筋から一本の白髪が垂れ尻尾のようだ。

ただ後ろ髪だけを結んでおり、耳を覆い隠し肩まで垂れている横髪は、そのままだ

さて、そんな二人がいる建物はマグノリアに複数ある魔法具屋の一つである。

先程、エルザにクナイのことを聞いたナナシが髪留めを購入した後、行きたいと縋つたのだ。

「おや、エルザちゃん。デートかい？」

「いえ、子守です」

「〇七

そこにはエルザ行きつけ店である。若く男性店主と仲良く喋るエルザ。

その横には子守と書かれた言葉に衝撃を受け、よよよとへたり込んでいるナナシの姿があった。

「むつー。」

しかし、何かに気付いたナナシは、すぐに氣を取り戻し立ち上がると店主に詰め寄る。

「それより店主ー！クナイとやらを出しあがれー！」

ナナシは詰め寄った。左手に鈍色に光るナイフを握りながら。

፳፻፲፻

「おらクソ店主！早く出せねえと首と胴が離あぶんつ！？」

「ナイフを持ったまま人に近付くな！」

— ■ ■ ■

10

1

現在、私は怒られている。ただ怒られているのではない。正座だ。

「いいか！あれほど人前でナイフを出すなと言つていただろ？！」

「……前にエルザは良いって言つたじやねえか」

「あれは悪人にだけだ！」

悪人とか判別つかねえよ。私にとつたら知り合い以外悪人に見え
るな。特に店主野郎は真っ黒だ！

「ちやんと聞いていいのか?」

怒鳴り声を上げるエルザには飽き飽きだ。別にいいじゃないか。私はクナイを見たかったのだ。

まあ先程、店主野郎が見せてくれたがな。しかし残念なことにクナイには全然惹かれなかつた。つまらない。

それなのに、この説教だ。余計つまらない。婆さんに貰つた小遣いも増やしたし、魔導書でも買いに行くとするか。

「まあまあエルザちゃん。僕は大丈夫だから

「本当にすまない」

ふん、エルザは店主野郎なんかと、仲良く忙しいようだから勝手にさせてもらおう。さて影に潜つて移動開始だ。

【転影移】

店主野郎と目が合つたので一睨みしながら影へぐぶりと沈んだ。店主野郎は震えてやがつたな。何かムカつく。今度会つたらシメテやる。

そう考へながら、適当に別の影に転移すると勢い良く飛び出す。

「 ももつー？」

「 あ？」

誰かの影から飛び出したようだな。場所は大通りか。

「 だ、誰？ つて嘘！？ ナナシじゃない！？」

私の名前を知っているだと？ その声に私が振り返ると驚いて目を見開いている女がいた。

「 何だ…… カナか」

「 何だまじつちよー こきなつビックリしたんだからー！」

「 もうかい、そうかい」

私の目の前にいる女は、カナ・アルベローナ。

茶色の髪を一結びにして、ポニー・テールにして、オレンジを基調としたワンピースを着た女だ。

私より年下の一一歳である。フュアリー・テイルの魔導士である。

カナと出会ったのはエルザのレッスンの一環。

友を増やした方がいいとのことでエルザが森に連れて來たのだ。

他にはナツやグレイとも友になつてゐる。アイツラは、なかなかに騒がしい奴らなんだよなあ。

「てか、森から出でていいの？ ポーリュシカさんに怒られるんじゃ……」

「今日は街アビューなんだ。では私は行くぞ」

驚いているカナは差し置いて歩く。せつせつと魔導書を買ひに行こう。

エルザなんか店主野郎と仲良くなつてつらうござんだった。私の知つたことはない。

「あつ！ ちよつと待つてよ。」

オープン

時間は昼過ぎ。

商業区には数十にも及ぶ食事処があり、多くの来訪者により賑わっていた。

とあるカフェでは多くの者が建物に入り、食事をしている。

だが、少数の者は外に設置してあるテーブルで、通りの賑わいを見ながら食事をしているようだ。

曰わくオープンカフェといったところか。席は殆どが埋め尽くされており、店員が忙しなく働いている。

そんな繁盛しているオープンカフェの一つにナナシとカナの二人が居た。出会つてから、すぐに魔法具屋に向かつっていたナナシが、カナに無理矢理引っ張られてきたのだ。

「よくもまあ、そんなにいっぱい食べられるわね」

オレンジを基調としたワンピースに身を包んだ少女カナが、テーブルに広げられた料理を見ながら唸る。

二人が居る木製のテーブルには、大人でも食べきれるとは思えないような大量のクリームパスタが置いてあった。

五人前以上あり、隣に座る客や通りかかった客がテーブルを一度見、三度見て啞然とした程の量だ。

それをナナシは一人で食していた。カナは胸やけがすると言い、ジュークをストローで啜るだけ。

「ん？ オヤツだし、普通はこれぐらいじゃないか？」

「全然、普通じゃない。それにオヤツじゃなくてご飯になってるから

「そうか？ オヤツだから我慢して少なめなんだが……」

「この量で少なめ！？ 見るだけでお腹いっぴいね。どこにそんだけ入るか不思議でたまらないわ」

「……いや、お前もな……」

ナナシはポーリュシカに仕込まれたであろう作法で、器用にフォークとスプーンを使い、パスタを食す。その一方で、カナに呆れた視線をぶつけていた。

「何よ？ 私に何かついてる？ 髪はせつせセツトしたばかりだし……」

ナナシの視線が気になつたカナは、キヨロキヨロとおかしこころがないか探し出す。

だが、いつも通りであることを確認すると、ほつと胸を撫で下ろし、再び視線をナナシに戻した。

「私つて、どこか変？」

「お前……ジュースの樽飲みって初めて見たぞ？ 普通じゃねえよ
「何だそんなことだつたの。これくらい普通よ普通。私にとつたら、
ナナシの方こそ有り得ないわ」

「いやいやいや」

そう、カナはジュースを樽飲みしている。テーブルに載せきれなかつたため地面に置かれた樽から長いストローが伸び、それを啜つているのだ。

これまた通りかかった人達が一度見、三度見した理由だ。小さな子供達が馬鹿食い、馬鹿飲みをしているのだから。

「「私より絶対変！」」

そう言いながら、食す一人を見て

（……どちらも変だから……）

そう、隣にいた客が心で呟いたそうな。

「ナナシは街に来たのが、初めてだから常識を知らないんだよ」

「しかし本で樽飲みとか読んだことがないぞ」

「本は現実とは違つんだよ?」

「そうなのか?」

「もつとナナシは勉強しないとね。今日は勉強になつてよかつたわ
ね」

「むう。樽飲みは当たり前か」

「そうよ。だから今日はナナシの奢りね。レディに失礼なことを言
つたんだから」

「それも常識なのか?」

「常識よ レディファーストって言つの。『』飯やケーキとか一
緒に食べるときは、男が女に奢つてあげるんだよ」

「レディファーストねえ。街つて大変なんだな。わあつたよ。今回
は私の奢りだ」

「やつたね そうだ。お礼に良い」と教えてあげる。週サラつて読んだことがある?」

「あーあれかあ

週サラ。週刊ソーナラーと言つ雜誌の略称だ。ちなみに週刊ソーナラーとは、魔導士達のための情報雜誌である。魔法界に関する様々なことが書かれており、ナナシも愛読している。

「週サラだる。あれつて表紙ないよな。雑誌なのに不思議に思つてたんだよな」「

「表紙?」

「そつそつ。いきなり目次とか無しに文章とかが入つてだる。エルザに聞いてもそれが普通だつていう……」

「ん? 表紙ならあるじやん。グラビア写真だけ?」

「へ? ぐらびあ? 何の話だ?」

「週サラの話でしょ?」

「ああ

「何か話が繋がらないね……」

どちらがおかしいか明白だが、話が繋がらないため、カナは話を換え始めた。

「週サラは置いといて。それより今日はエルザと一緒にじゃないの？ 街に行くには同行が条件じゃなかつた？」

「ほんと首を可愛らしく傾けたカナは、ストローを銜えたまま尋ねた。

「……よく覚えていたな……」

「そりや、ナナシが嬉しそうに何度も話せば嫌でも覚えちゃうよ。今は嬉しくなれやうだけど、街は気に入らなかつた？」

「いや、まあ気に入つては……」

「それに半年経つたらフュアリー・テイルに入るんでしょ？」

「……まだ考え中だ。やりたいことも見つかってないしな

「入つてから考えればいいのに……。フュアリー・テイルもマグノリアも良い所だよ。ナナシにも気に入つて欲しいな。それに入つたら、何時も一緒にいれるんだよ？」

「……考えとくよ……」

カナが嬉しそうに答えた後、ナナシは眉を寄せて深く思考する顔をした。しかし、それもカナの声によつて中断させられる。

「それよりエルザは？」

「エルザは魔法具屋の店主野郎と仲良くなしかつたよつだかりな。置いてきた」

「あ～あんた達、また喧嘩したね」

「ちばえよー」

「それもそつか。違うよね。何時もナナシが殴られて終わりだもんね。じやあ、何でエルザから離れたの？」

「殴られて終わりとか失礼な奴だな。てか、さつきも言つたじやねえか。エルザが店主野郎と

「もしかして、また嫉妬？」

「はあ？ それこそちばえよ」

「はいはい、またなの？ 本当に子供もなんだから」

「だから、ちばえつてー！」

ナナシのムキになつた言葉に、カナは僅かに口の端を上げると、ニヤニヤと笑つた。

「大体、エルザが……」

そして「反論するでも意見を差し挟むでもなく、ただナナシの愚痴話を聞いてのであった。しかしナナシの愚痴が一通り終わると、既に力ナの顔は笑っていないく、心配そうな表情をしていた。

「また勝手に逃げてきたのね。エルザに怒られるよ、怒られる前に謝つた方がいいんじゃない？」

「何でだよ。私は何も悪くないさ」

「せつとき離れないって約束したんでしょう？」

「……むう……」

「エルザも朝早く起きて頑張ってたんじゃないの？」

力ナが困惑した表情でナナシを見る。だがナナシは、もう喋ることはないと言わんばかりに、黙々とパスタを口にかき込んで無視し始めた。

「……全く……」

何度も話し掛けても話そとしないため、カナは頬杖を付いてナナシが食べ終わるのを見守っていた。一通り食事が終わるとカナが話を切り出す。

「エルザの話じやなくて、私のお願ひだから聞いてくれる?」

「……あんだけよ」

「暇なら買い物付き合つてよ。来週、皆でクエストに行く予定なんだ」

「クエスト? ああ、ギルドの仕事か。皆つてナツ達とか?」

「そうよ。皆でハコベ山にバルカン狩りに行くんだ」

「バルカン! ?」

「そうよ! 濃いでしょ! 討伐クエストだよ!」

「ありや、凶悪モンスターだぞ。あぶねえだろ」

「マスターが皆で行くなら良いつて許可くれたんだ
だ。五匹! 」

五匹倒すん

カナは嬉しそうに語るが、ナナシは眉を寄せて思案顔だ。

凶悪モンスター、バルカン。ハコベ山に生息する大猿の形をしたモンスターだ。

「ありや 危険な奴なんだぞ、人をな……」

「それは知ってるよ。でも大丈夫。ナツ、グレイ、エルザと一緒に
行くんだから」

「それにお前もだ。ナナシ」

「むう。 そ、うか。 ナツとグレイとエルザ。 それにカナと私か。 なら
大丈……え？」

ふと、ナナシの背後から聞き覚えのある声が聞こえた。ただ背後
にいるだけなのに、威圧を感じ、ナナシの背を冷たい汗がドツと伝
つた。

ギギギと音が鳴りそうなぐらいきこりなくナナシが振り返ると、
そこには

「探したぞ。ナナシ。こんなところでカナと仲良く、で、デートか。
か、覚悟は出来ていいのだろうな？」

「めかみをピクピクと動かしながら、無表情で睨みつけてくるエルザだった。

「…………めんね…………」

その顔を見た瞬間、ナナシの顔に苦々しい表情が広がり、すぐに謝ったが

「許さないからな」

時すでに遅し。

にっこりと笑いもせずに声のトーンを上げたエルザに、ナナシは首根っこを力強く掴まれてしまった。

「カナ！ 助けて！？」

「またカナか！？ お前はそんなに私と居るのが嫌なのか！」

「ち、違つ！？ あ、あれはお前が店主野郎と……」

「言い訳はしなくていい！」

二人はそう言い争いながら路地裏へと消えていった。その

「あ～あ」

対してカナは席に座りジュークを啜つてあり、時折聞こえる悲鳴に、ほれ見たことかと溜め息を吐く。そして一部始終を見る事も、ナナシを助ける事もなかつたのである。

⋮⋮⋮

オープンカフェにて。

「何だ、またナナシの嫉妬だったのか」

「違つ！？」

「私やナツ達の時も凄かつたもんね。ボロボロになつたもん……ナシが……」

「ナツ達に接近戦を挑むからだ」

「ちよつ！？私の話を」

「嫉妬なら、そつ^{てつ}言えれば私もレッスンしなかつたのに……」

「しょうがないよ。ナナシはへたれだから」

二人とも聞いてくれないや。てか力ナよ。へたれってなんぞ！？
酷くないか！

「それより私も走り回つてお腹が空いたな。ナナシ、ウェイターを呼んできてくれ」

「OK！ 今すぐ、呼んでくるね！」

「完全に心が折れてる」

力ナの奴、何言つてんだ？ エルザ様の言つことは聞かなくちゃいけないんだ。常識だろ。さてウェイターはどこにいるのかな。

あ、いたいた。

HEY！ウェイター！

⋮ ⋮ ⋮

さて、エルザ様もお食事を終わられたことだし

「エルザ様、バルカン狩りは危険じゃねえか？」

「ああ、様は付けなくていい」

「へいー。」

「……へたれ……」

またカナか。そんなジト目で見るなよ。何だか恥ずかしいじゃないか。てか、そんなことよりバルカンだ。

「部外者の私が口を出すのもなんだが、危ないんじゃね？」

「それに関しては注意すれば大事に至らないだらう。私は既に討伐経験済みだからな。それに今回はナツ達の同行みたいなものだ」

なるほど。さすがはエルザだな。既に経験済みとは……。本当に「イツは12歳の女か？」

「てか、何で私も連れて行くんだ？流石にバルカン狩りはなあ

「森バルカンは何回か狩っているのだろう？」

「まあ一回ぐらいな

森バルカンとはハコベ山ではなく、東の森に多数生息しているバルカンのことだ。

アイツらは倒すのに一苦労なんだが、ナイフの練習や魔法の練習にバツチリなんだ。特にナイフの練習は相手が必要だからなあ。

「嘘つ！？ ナナシ、バルカン倒せるの！？」

「あ？ いや、二回だけだ。しかも補助の魔法で倒したのであって、私としては倒した気はしないんだがな」

「魔法で倒せば十分だ。大体、お前は魔法だけを使えと何度も言つたら分かるんだ」

「魔法は補助なんだ！」

「体力がないくせに接近戦を挑むお前は馬鹿だ」

「ぐつ」

「……ナナシがバルカン倒せるとか信じられない……」

エルザは何時も人の弱いところを突いてくるから嫌いだ！ てか、カナは何で驚いているんだ？

「それよりハコベ山のは、こっちのよりレベルが高いと聞いたが？」

「だからお前を同行せねんだ。経験すれば強くなれる」

「おお！ 確かに！」

「ただし、ナイフは使わせないからな」

「ええー」

「接近戦で森バルカンは倒したことはないのだ」

「そりゃ……あむーあむー決まってこむー。」

「「嘘か」」

「そりゃー！ 私は接近戦でバルカンを倒したことはないー。血漬けならねー……。

それにしても、何でコイツらには、すぐ「バレンさんだ！」。誰か私の嘘が通じる相手は居ないだろ？

「あんた、そりゃ、自分で言つてたじゃない」

「…………あ…………」

「ぐ、女に言ふ負かされるとま。 もうと修行して嘘を吐くのを上

手になつて、カナ達を『ふん』と言わせてやるー！

よし、その件はそれでいいとして、今回のバルカン狩りに同行させると言つならば、私の練習相手にさせてもらおうー。エルザから離れば、ナイフを使っても問題はあるまい。

つて、そう言えば

「カナは買い物に行かなくてもいいのか？ 私も魔導書買つだけだから付き合つてもいいぞ？」

「ホント！？」

「む！」

ふと、思い出したことを尋ねる。カナは嬉しそうに笑い、エルザは不機嫌な顔をしてくる。

何でだ？ 買い物の手伝いだぞ？ そろそろ時間も遅くなってきたからな。今日は魔導書と……カナが何やら言つていた【ぐらびあ】付きの週サラーを買つだけで終わりだらう。

来週はバルカン狩りだと言つし、準備が必要だ。ナイフを研いでおかないと！

「本当に好き合ってくれるの？」

「ああ、もう」

「やったね 荷物持ちゲット ハロベ山は極寒の地だからね。コートとか買いたかったんだ」

「ちょっと、手を引っ張るなーあと流石にコートは着らんなーぞ」

「別にいいよ。まじまじ見るのは」

ワクワクしながら、私の手を取つて先に行こうとするカナ。

手がやわやわだ。やっぱり女の体は柔らかな。抱き締めたら、どんなに柔らかいのだろうか。

「やわやわで最高だ」

「あなたは相変わらず、柔らかいの好きね」

「いやあ、何か落ち着くんだよ。そう言えば、森バルカンの毛並みも柔らかえんだよな。やわやわで、もふもふしてるんだ」

「うわあ、私の手はバルカンと同等とか引くわ。何か変態っぽいよ」

「……ナナシがカナに取られた……」

柔らかいのなら変態で結構だ。やわやわは天国である。そう幸せに浸つて歩き始めたが、エルザが着いて来ないな。俯いているが、どうしたんだ？ そう思考した時、歩く私の腕をエルザに引っ張られて止められた。

「ま、待て」

「どうした？ 買い物行かないのか？ 一緒に行こうぜ。エルザが居なきゃ楽しくない」

「か、買い物は行くに決まっているだろ？ お、お前を一人にしたらダメだからな。い、これなら離れることはできないぞ！」

「うう言い、服ではなく手をギュッと握り締めてきた。マジで！？ 両手とも、やわやわとか、どんだけ幸せなんだよ！？」

「コイツあ、森バルカンの毛並みより柔らかいよ！？」

「ま、行くぞ」

「柔らけえ」

エルザとカナはナナシの手を引つ張つて通りを歩く。3人が通りを進むに連れて、辺りは色とりどりな店が増えていった。

それらをキヨロキヨロしながら嬉しそうに見るナナシは、エルザとカナを両手に花状態で街を歩いたそつな。

その後、何とか魔導書と週刊ソーサラーを手に入れたナナシは

「ーー、これが、ぐらびあとな！？ 破廉恥な！ ポインボインではないか！？」

新たな道へと踏み出していた。少年魔導士は大人への……いや、変態への階段を登り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4195z/>

名無しの影使い

2011年12月28日13時46分発行